明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年三月一日發行（毎月一回一日發行）

第廿四年　「統一」　三月號

「統一」

（第三百號）

時言……本多日生

吾人の所見――誤れる自覺――日蓮の天魔の解――日本文明の正統
――開顯統一の秘鍵――我が惟神の大道――聖賢の明敎――佛敎の大敎化――哲人の出現――過激派の唯一手段――區々の葛藤

日蓮主義の抱負……本多日生
社會改造と日蓮主義……本多日生
平和會議所感……山川端夫
佛敎信仰の正統……本多日生
世俗諦と勝義諦……本多日生
日蓮主義綱要……井村日咸
勞働問題根本解決策……永井米藏
形骸……笹川篁堂
基督敎徒としての大矢氏に與ふ……金島英夫
記事報道十數件

脚本　河邊の吹雪……野村香明子

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年二月一日發行（毎月一回一日發行）

念珠ならば小野嘉助店へ――
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
●御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候
京都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商　小野嘉助
電話中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

布田眼の藥　効能、たゞれ目、かすみ目、ほし目、くもり目、ちち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等
定價壹瓶、拾五錢、廿錢、卅錢、五拾錢、七拾錢、壹圓

布田血の藥　定價二包入拾五錢、十五包入壹圓、効能、男女ちの道、產前產後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絕、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪
千葉縣山武郡源村上布田參百番地藥王寺
布眼藥　布田血の藥　本舗　齋藤日章
（御注文は總へて下記振替に）
賀正　（振替東京第六七九一番）

●日蓮各宗――寺院――御僧
――法衣――草木――直に御聯想下され候儀に候
京都　草木本店
三條通烏丸東入ル町
電話中七三五番
振替口座東一一五五九番
東京淺草區三好町二番地
電話下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番
草木支店

●佛具調度所
●佛像佛具
●位牌木鉦
●宮殿憧天蓋其他一式
●苟も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各敎團
京都寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」佛師　辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話下三二五八番
大多少に限らず御用奉願上候也
●御用仰せ被下候はゞ叮嚀深切を旨と致候●
御用達

●佛壇、佛具一切卸小賣
店員十三歲ヨリ四五六歲迄之者五六名御世話被下度候

定價表　郵稅四錢
卸部　三法堂藤田總治
京都市三條通小橋西入中島町
各宗御本山御用達
畫佛表具師
大佛師
長距離電話中二七八三番
東京二〇七一
振替口座大阪四二五九
同區小橋東入
小賣部　三法堂佛具陳列場

生徒募集
千葉縣千葉郡千葉町院內
（千葉神社裏通憲兵屯所向橫丁）
私立山口刺繡學校
校長　山口京太郎
規則書入用の方は御通知次第校則を進呈いたします

發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄（▲本誌定價一冊貳拾錢郵稅五厘▼）

（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）

爾の時に秘密金剛手、復佛に白して言さく、世尊よ、佛の所說の如き、諸佛は常に平等三昧に住し、等しく衆生を視ること猶ほ一子の如しと、今は云何ぞ但國界主を守護すと言ふや、諸有の貧窮孤惸の困苦して依無く歸無く救無く護無きものを、何ぞ愍念し而も守護したまはざるや、爾の時に如來無上調御、秘密金剛手に告げて言はく、善男子よ、諦かに聽け諦かに聽け、當に汝が爲に說くべし、諸佛如來は平等三昧に住せざるにあらず、平等に由るが故に國王を守護す、善男子よ、譬へば良醫の小さき嬰孩を見るに身疾病に縈り醫藥に勝へず、乃ち良藥を以て母に之を服せしめ、母の服藥の力及び乳に由つて、其の子乳を飲まば疾病皆除こるが如く、諸佛如來も亦復是の如し、一切を哀愍して國王を守護す、若し國王を護れば七を護るの勝益あり、何等を七と爲す、所謂若し能く國王を守護せば即ち是れ國の太子を守護するなり、若し太子を守護せば即ち大臣を守護するなり、若し大臣を守護せば即ち百姓を守護するなり、若し百姓を守護せば即ち庫藏を守護するなり、若し庫藏を守護せば即ち四兵を守護するなり、若し四兵を守護せば即隣國を守護するなり、若し能く是の如くせば一切皆安からん、善男子よ、是の故に國王は諸の衆生の與に日と爲り月と爲り燈と爲り眼と爲り父と爲り母と爲る、若し諸の有情眼無く燈無く日無く月無く父無く母無くば身命存すべけんや、若し國王無くば安立すべからず。又善男子よ、大龍池の如き、龍若し住する時は水常に盈滿して龜鼈魚鼈水族皆安し、龍若し去る時は水便ち枯涸して水性の屬皆滅して餘り無けん、國王も亦爾なり、故に我れ偏に守護國王を說くなり。

（守護國界守經、正大藏第十五卷の十）

時言

本多日生

◎吾人の所見　今や我が國民の思想は急激なる變化を來たさんとす、而してその推移の方向決して健全なりと言ふを得ず、寧ろ險惡化せんとするものゝ如し、これ一日も放任を容さゞる所なり。予は剴下の一切の事象中に於て、この思想の惡化を以て、最大の問題なりと認む、この大問題の爲には他の一切の問題は制約せられ、又按排せらるべきなり。この思想の惡化を助長するが如き言動に對しては、吾人は一切之を否定し、一切之を排除し、一切之を撃滅せんことを期す、これ日蓮主義唯一の天職にして、又これ眞日本人の本分ならんか。

◎誤れる自覺　現時各方面に自覺を促すの聲頗る盛んなるが、而もその自覺の內容を研覈するに、その多くは誤れる自覺に屬し、その宣傳者は考慮極めて粗雜なるのみならず、元來文化を批判すべき識見と能力とを缺失せるの徒なり。一兩年來絕叫せられつゝある、デモクラシーの宣傳は如何、その波及浸染する所果して善良なる風化を興せしか、吾人の當初より憂慮せし如く、群衆無智の輩を驅つて良風美俗を蹂躙せしめ、傲慢不遜の惡風を助長し、崇高なる愛國心を滅殺し精神的文化を呪詛し、社會の秩序を攪亂し、その甚しきに至つては、國家的事業に對して暴動的罷工を勃發せしめ、神聖なる議會を暴民政治化せしめんとし、而してその論爭する所は殆んど私利私欲の爲めならざるは無きの觀あり。若し夫れ無智の群衆をして一たび暴動の惡風に慣れしめんか、如何なる政策を採るも、如何なる敎化を施すも、遂に統治し難きに至らん、之を各國の事例に照して、事頗る明白なるにあらずや。故にその目的の政權爭奪にありとするも、若くは小なる野心の爲めなりとするも、將た又暗愚にして眞面目に曖昧に捕はるゝより起るとするも、その動機の何たるを問はず、群衆を煽動して暴民化せしむるが如き運動は、一切之を罪惡なりと斷定して可なり。現代人類幸福の强敵は群衆の暴動化なり、國家崩壞の最大危險も亦群衆の暴動化なり、それ果して然らば群衆の暴動化を誘致するが如き言動は、之を一括して人類の敵、文明の敵、國家の敵、佛敵法敵なりと言ふべく、これ全く惡魔の所行なりと斷じて可なり。吾人はこの意義に於て毅然として誤れる自覺運動に反對す。

◎日蓮の天魔の解　聖者日蓮曾て佛徒中の慢幢高き一類を評して天魔の屬と爲す、その意他なし、自己の絕對と惡平等とに走せて、正道を亂り秩序を破るを惡むなり、今人の言ふ所如何、多くは自我を極端に骨强し、又上下尊卑の別を呪詛し、以て仁慈謝恩の大道を無視し、君臣父子師長恭敬の美風を蹂躙せんとす、これ惡魔の所行にあらずして何ぞ。見よこれ等の邪說が歐米の天地を如何に毒害しつゝあるかを、醉へる者は社に尿し天に唾す、故に吾人の正明の敎化に對し

ても、尙且つ惡罵する者あらんも、そは所謂惡鬼の爲めに本心を失へるに外ならず、天定まり地和らぎ人醒むるの時は、呆然としてその狂愚を耻づるなるべし、そは惡鬼退散怨敵撃滅の時なり。凡そ人類全般をして火坑に投ぜんとするが如き大悲慘事は、單に人力のみを以ては回避し難し、仰いで佛天三寶の加護を求め、各人本具の靈性に醒めて、彼の私利私欲より來れる妄想邪念を一掃すべきなり、然らずんば遂に人生を擧げて惡魔の翫弄に委せん、眞に戰慄すべく誡愼すべきは今日なり。

◎日本文明の正統

今日民心の歸嚮を導かんとするには、先づ以て日本文明の正統に基かずんばあらず、彼の內には歷史的文明の道統を忘れ、外には歐米思潮の一角に屈從する輩の、暗愚なるは云ふまでもなく、又彼の固陋にして建國當初の素朴なる文化に立籠らんとするの稚態は、併せて否定せずんばあらず、斯の如き輕跳者流と頑迷者輩とは、これ倶に我國文明の正統を識得せざるの徒なり。我が日本文明の正統とは如何、これ頗る顯露分明にして圓月の冲天に懸るが如く、萬人齊しく仰ぎ見て奉持すべき所なり。知識を世界に求めて大いに皇基を振起すべし、我國にしげり合ひけり外國の草木の苗もおほし立つれば、周公孔子三代の學を習ふとも和魂漢才ならざるべからず、法は國を鑑みて弘むべし彼の國によかりし法なればとて此國にもよかるべしとは思ふべからず世態變遷すとも大義存すと。これ等の明教凜乎として國民の頭上を照せり、復何の惑ふ所かあらん由來我が建國の大精神は廣く世界の文化を開顯統一し、その大成せる文化を以て再び之を四海に布かんとするにあり、故に之を包容すること濶大なると同時に、取捨洗鍊の批判を嚴密にし、常に自主的識見を有して廣く文化を攝取す、過去に支那印度の文明に接觸せしも、克くこの大精神を發揮し來たれり、明治維新以來泰西文明に對する態度も亦その揆一なるべきなり、然るに歐洲大戰以來頓にこの大精神を逸却せる者輩の增加せるが如し、これ所謂惡鬼の爲めに精氣を奪はれしものか、何ぞその態度の輕佻に走り、又頑迷に傾けるや。この建國の大精神たる文化の開顯統一を翼贊するは、眞日本人の本領にして、この意義に於て法華經は特に我國に大因緣を存し、日蓮主義は今日に至りて愈〻その眞價を發見せられたるなり。

◎開顯統一の秘鍵

文化の開顯統一に就ては、最も精密にその方式を學ばずんばあらず、彼の大勢順應を言ひ、日本的同化を說く者は、開顯統一の方式より見て、頗る幼稚の域に在るを見る、その順應と言ひ同化と言ふに於て、凜然たる基準を有せざるなり、何物が眞に順應すべき世界的公道なりや、その何物が眞に我國に於て能化者たりや、この間批評の標準極めて粗雜なるもの〻如し、これ開顯統一の方式に於て、第一に警誡すべき所なり、聖者日蓮は言ふ「日本國の謗法は爾前の圓と法華の圓と一なりと言ふ義の盛んなるより事起れり」と、この聖語は深く留意すべき所なり、その教義思想は殆んど同一の如く見ゆれとも、純圓と雜圓とを分別し、純圓を批判の標準として、取捨破立の大權を、常に純圓の思

想に置かずんばあらず、こゝに能開所開の別を存し、開顯以後にもこの綱格を守持し、之が爲めには似て非なるものは嚴に之を誡めざるべからず、故に聖者日蓮は言ふ「寒食の祭には赤きを忌む」と、縱し些少なりとも批判の基準に觸るゝよりは、斷然之を排斥すべきなり、又言ふ「奪ふは法華の意なり」と、若しも根本標準に觸るゝものは、之を批判するに當りては寬容の態度を容さず、最も森嚴に之を否定すべしと言ふなり。我が建國の大精神に基き、世界的文化を開顯統一せんとするに當りては、異邦に在りて已に幾多の害毒を流し失敗を暴露せるが如き教義思想に對しては、斷乎として之を峻拒せずんばあらず。之に反して能く我が文化に統合融和せられ長き歷史を經て國民の血と成り肉と成れる教義思想に對しては、深く之を愛惜して決してその廢頹を默過すべきにあらず歐米の如く新を逐ふて移るは、開顯統一の抱負を有する國家の學ぶべき所にあらず、彼は方等部の如き文明なり、此は法華經の如き文明なり、この間の消息をだも會得せざる者輩は決して我が文化に容喙するの權利を有せず。

◎我か惟神の大道

我が建國以來の大經は、赫々として天日の萬象を照すが如く、昭々乎として意義頗る正明なり天業を恢弘し天下を光宅する爲に、我が中津國は建設せられこの建國の大精神を體現して皇統萬世に輝き、億兆心を一にして世々之を翼贊し、漸を追ふてこの天業を達成せんとす。故に我が國民の精神はこの國家的大理想に指導せられ、個々の理想は國家的大理想に歸趣し統一せられ、隨つて個々の實利を貪らんとするが如き低劣なる觀念を採らず、國家も亦國民の實利を擁護するに偏して、侵略を事とするが如きこと無く、內には高潔なる文化を大成し、外には人類全體の福祉に寄與し、國家の體軀を肥して精神を汚すが如きは、最も耻辱とする所にして、この觀念は武士道の美として絢爛の美を競ひ、曾て一たびも我國の歷史を汚せしことあらず、我國は正義を口舌の上に弄するを耻とし、之を事實の上に體現しつゝ來れり、この惟神の大道は我國と終始すべきものにして、世界の風潮に由りて汚さるゝを容さず、富岳の屹然として峙つ限り、旭日の光耀として東天に輝く限り、櫻花の絢爛として年々開敷する限り、代は變り歲は移るとも、變改を容さゞる所なり。而してこの高潔なる惟神の大道に照して、今日民衆の蠢動する所を見ば、その方向を誤れること極めて明かなり我が國人は思想を高潔にし、精神を溯達にし、抱負を遠大にし、自ら大いに任ずる所なくんばあらず、「日は東より出でゝ西を照す」と、聖者日蓮が我が國民に敎ふる所は、夫れ斯の如くに親切にして、これ則ち惟神の大道の全精神ならんか。

◎聖賢の明教

我が國には幸に支那文明の精髓を開顯統一し、以て我が文化を豐富にせり。先帝の御製に「開けゆく時にいよ〳〵仰がれぬ、ひじりの御代の高き教は」と示したまひ、又教育勅語に於ても軍人勅諭に於ても、聖賢の明教を採用したまへり、我が國民性はその敎化に負ふ所決して尠なしとせず、天道明德、至誠一貫、仁義忠孝等の德用今尙ほ民心を靈導せり、その功績極めて大なるを見る、今論孟を手に

して子細に之を靜思すれば、一道の光明吾人の肺肝を照すものあるを覺えん、東洋文明には動かすべからざる契合點を有す活眼達識の士は一層聖賢の明教を宣揚すべきなり。

◎佛教の大教化

又我國は早く佛教の教化を普及し、今尚ほ多數國民の人身觀を支配するものは佛教なり、若し佛教を除外せば我が國民の思想は、殆んど根基を失ふに至らん、今日蠢動を事とする者輩は、悉く佛教の信念を有せざるの徒なり、予各地を巡化しその風教の如何を視察するに、佛教の普及せる所は斷じて思想惡化の惧なし、反佛教の氣分盛んなる所は、必然思想の惡化を伴ふ、この關係は頗る鮮明なり。

由來佛者の大教化は、その根底深遠にして且つ精密なれば、今日の如き世界的變化に際するも、斷じて驚動するを要せず事の表裏內外を洞察するの餘裕を存す、佛教の有する哲理、倫理の根底、及び調節、宗教的信仰及び意識、一般民衆の教化、智愚利鈍の普濟、四悉檀の施化等、實に現時の如き複雜なる人生を指導教化するには、最善最良唯一無二の法典なり而して東洋に起りし佛教は、東洋文明の契合點に於て、共通的性質を帶ぶるが故に、我國の文化を翼贊する上に於て、何等の危險なきのみならず、頗る克く國體國精を助顯す、曾て聖德太子が法華經を護國の妙典と稱し、傳教大師が王法佛法の冥合を唱へ、聖者日蓮が立正安國を論道せしは、即ち之を事證して餘り有りと謂ふべし。以上陳ぶる所の惟神の大道と國文明の明教と佛教の大教化とを開顯統一し來つて、こゝに我聖賢の明教を宣揚すべきなり、斯くて歐米文明を批判する根基を有し、國民思想の善導に任ずるを得べし、若し三教を無視し我が文明の正統を遺却して、文化運動を試みんとするあらば、その盲動たるや論なきなり。

◎哲人の出現

人類の幸福の爲め國運の隆昌の爲めに曉望して止まざるものは、實に哲人の出現なり、今の時は固陋なる學者を要せず、化石せる多くの宗教家を要せず、輕佻なる空論家を要せず、饒舌なる政論家を要せず、多數無智の集團を要せず、此時此際最も有用なるは哲人なり。今の文明の趨勢は確かに誤まれり、哲學の傾向は懷疑に走せ、倫理の觀念は自我發展に陷り、政治の歸向は衆愚に阿附し、經濟の運動は軌道を逸し、社會各般の事象月に險惡を加へ、生活の安全は容易に來らず、思想の擾亂は底止する所無く、學說の大部分も宗教の多くの活動も、民衆の幾多の運動も、殆んど堅實なる方途を有せざるなり。

故に今日は社會運動を根本より立て直し、政治政策を根底より考へ直し、學說教義はその原理本義より組み替へ、一切の思想と活動とを大回轉すべきの時なり、而してその能くこの大業を成す者は、唯だ惟り哲人の手腕に待つあるのみ、彼の區々の徒何をか爲さん、彼等が饒舌と蠢動とは偶ま以てその非を重ぬるに過ぎず。經に說く佛世に出てたまはざる時十方暗冥なりきと、今の時は大聖釋尊の如き大哲人の降臨を要す、吾人は切に佛天三寶の感應を仰ぐこと切なり。過激主義者は唯だ哲人の出現のみを恐る、他の屑々の徒の政治運動學說宣傳は擧げて、殆んど過激主義の先驅なりと斷じ、而して言ふ、哲人のみ吾人が紛擾に慣れ

しめし幾千萬の民衆よりも、一層の大事業を成し遂ぐるが故に、獨り哲人の出現は我黨の警戒すべき所なり、故に教育を平凡化し、政論を俗論化し、民衆を盲目に導き、時に或は無益なる競技に熱中せしめて哲人の出現を妨げ、世を擧げて低劣化せしめ、時に哲人の出てんとするあらば、先づ幾多の惡聲を放つて之を倒さずんばあらずと、過激派獨り賢なるに似たり。

◎無意識の鸚鵡

利口氣に見ゆる新思想家は、多く是れ無意識なる鸚鵡に同じ、彼等の紹介する學說思想は、歐米に於ける學說思想の直譯にして、而もその學說の果して正確なりや、その思想の果して堅實なりやは、子細に研覈したるにはあらず、異邦文明の不純なるものを其儘移せるに外ならず而してその學說その思想は或は淺見者流の空論なるあり、或はマッツン秘密運動に仕組まれたるあり、或は賣名野心の輩の毒說なるあり、不平反抗の氣分より放論せるあり、何れも細心の注意を拂はずんば、遂に國家社會を謬まるが如き大事の、その間に影響を受くるを知らず。斯の如き無意識なる鸚鵡の續出する時、遂に文明を失脚せしめ國家を崩壞に委す。行爲亂るゝを見て伏兵を知ると、この種の鸚鵡の群がるは、國家動亂の凶兆なり。過激主義者は揚言して曰く「吾人は吾人に分り切つて居る不正虛僞の主義と學說とを鼓吹して輕佻なる青年を煙に捲いて惑亂す」と、又曰く「吾人が『自由』『平等』『四海同胞』なる標語を民間に放ちしは既に古代の事に屬す、それ以來これ等の標語は何處となく無意識なる鸚鵡に復唱され、鸚鵡はこの好餌を目指して飛び集まり、これを啣へ去ると同時に、世界の幸福と先に群衆の壓迫より防護せられ居りし個人の眞の自由とを破壞せり。猪口才なる自稱文明人はこの熟語の抽象的なることを知らず、その愚笑ふべし」と。

◎過激派の唯一手段

過激派の唯一手段とは何ぞ、彼は言ふ「生活難より生ずる嫉妬憎惡の念を利用して群衆を動かし、群衆の盲動に由つて過激思想を遮る一切の者を撲滅すべし」と、彼の言ふ所頗る直截明晰にして、而して着々としてその所信を遂行しつゝあり。今の文明の最大危險は過激思想の蔓延にして、これ實に世界人類共同の敵なり、果して然らば一切の施設はこの毒思想の撃滅に向つて講ぜられざるべからず、復苟も過激思想を援助するが如き言動は、その直接援助と間接援助とを問はず、一齊に之を警戒し、その豫備行爲をも之を罪惡と認めずんばあらず、而して彼が唯一の擴張手段右の如くなりとせば、健全なる文明を擁護する者としては、生活問題より來たる民衆の暴動化に對しては一分も寬假すべきにあらず、寧ろ强敵を倒す爲めには正奇の戰法を應用するが如く、民衆暴動化の一事に對しては、國民の態度を更に大いに嚴正ならしむべし、吾人はこの點に關して切に我が國民の大決心を望んで止まず。

◎區々の葛藤

事態斯くの如く急なるの時、區々の葛藤を事として民衆を惡化せんとするものあり、吾人は政治運動の上にも、勞働運動の上にも、議會の論爭の上にも、叩りに

感傷的言動を事として、無智の民衆をして激昂せしめんとするは、その意を解するに苦まざるを得ず、今の時は何を最も慎み何を最も誡むべしと思へるや、吾人は斷言す、民心の不平を煽り、感情の激發を促し、爲に人心の變動を誘致し、延いて秩序を紊り壞亂を招くが如きことを無らしむるにあり、これ實に國家擁護の爲に、聖慮を安んじ奉る爲に、國民全體の幸福の爲に、將た又世界の文化に貢献せんが爲に、我が國民の一心協力、自警自誡して、一意努力すべき所ならずや。然るに我國の勞働運動は決して合理的にあらず、之を八幡製鐵所の熔鋼爐を冷却せしめて、國家の不利を顧みざるに見るも、又政治運動に於て、區々たる言葉尻を捕へて紛擾を事とするに見るも、何れも、吾人の信ずる限りに於ては、彼等は敵の本營を知らず、味方の旗印をも知らざるの徒と謂ふべきなり。聖者日蓮曰く「守城者にして城を破るは最も惡むべし」郷等は即今の文明の敵、國家の敵を果して何れに置くや、希くは不知不識の間に過激派の走狗となるなくんば幸なり。

妙判

日蓮主義の抱負

本多日生

神國王臣（遺一三五八）父母兄弟王臣萬民等互ニ大怨敵ト成リ、鳥鳥ガ母ヲ食ヒ破鏡ガ父ヲ害スルガ如ク、自國ヲ破ラセテ、結句他國ヨリ其國ヲセメサスベシト見ヘテ候、今日蓮一代聖教ノ明鏡ヲモテ日本國ヲ浮べ見候ニ、此ノ鏡ニ浮ンデ候人々ハ、國敵佛敵タルコト疑ヒナシ。一代聖教ノ中ニ法華經ハ明鏡ノ中ノ神鏡ナリ、銅鏡等ハ人ノ形ヲバウカブレドモ未ダ心ヲバ浮べズ、法華經ハ人ノ形ヲ浮ブルノミナラズ、心ヲモ浮ベタマヘリ、心ヲ浮ブルノミナラズ先業ヲモ未來ヲモ照ミタマウ事疑リナシ。法華經ノ第七ノ卷ヲ見候ヘバ、如來ノ滅後ニ於テ佛ノ所說ノ經ノ因緣及ビ次第ヲ知ッテ、義ニ隨ッテ實ノ如ク說カン、日月ノ光明ノ能ク諸ノ幽冥ヲ除クガ如ク、斯ノ人世間ニ行ジテ能ク衆生ノ闇ヲ滅セン等ト云々、文ノ心ハ此ノ法華經ヲ一字モ一句モ說ク人ハ、必ズ一代聖教ノ淺深ト次第トテ能々辨ヘタラン人ノ說クベキ事ニ候。

聖者日蓮は我が國人が正念を棄り正法に反せしを慨し、民心乖離して君臣の大義父子の情誼を失ふを見、之を鳥鳥破鏡に比し、内に秩序を紊亂するは國家を崩壞する前徴なるを明し、結局他國より侵略せらるべきを說く。その志の天下國家に存することを明かにす、こゝに彼の獨善的主義厭世的主義と撰を異にするを見るべし。聖者日蓮はこの國狀を考察し、之を如來の聖教より照し、國民が正義を棄り正法に反するを指して、國敵佛敵なりと斷じ、こゝに法華經は佛教中の神鏡なりと激稱し。又神力品の聖語を引證し來り、法華經者は一代聖教の淺深と次第とを辨へて、教化を勵るべきを示す、この聖訓は深く留意すべき所にして、中古以來の日蓮門下が、末疏より末疏に流れて、佛教全體に對する考察を輕んじたるは、全く逆路の子たるを見るべし、今尙ほ歷めざるの學徒少なからざるが如きは、眞に慚愧すべき所なり。

社會改造と日蓮主義

本多日生

私の講題は「社會改造と日蓮主義」と題して置きましたが、近來社會改造といふ言葉が盛んに唱へられて居ります、私は餘りにこの言葉を喜ばない者でありますけれども、日蓮主義は社會改造といふ主張に對して、確かに一種の主張を持つて居るものでありますから、この社會改造意見に關して、如何なる立場に居るものであるかといふことに就て、聊か自分の考へます所を申上げることは、天晴會の講演としては、或は何等かの御參考になりはせないかと考へるのであります。

一、日蓮主義の綱格

最初に日蓮主義の綱格に就て一言して置きたい、それは既に諸君も御承知でありませうが、日蓮聖人は總ての問題を解決する前に五つの綱格を準備しなければならぬといふ事を說かれて居ります。即ち聖人が自己の主張を發表する以前に少なくとも、この五大綱格に關しての見解を定めなければならぬといふことを言はれて居る。それは「教、機、時、國、序」と稱へて居りますがその中には色々深い意味がありますけれども、今晩の講題に直接に關係の或る方面のみ申しますれば、日蓮聖人の主張する所の「教」は實大乘教でなくてはならぬと申して居る、それはどういふ事を意味して居るかと言へば、即ち開顯統一といふ事を明らかにして居るものが實大乘教である。餘程よく見えても開顯といふ理想を持たないものは、權大乘教に攝するのであります。さうすると聖人の教を立つる前提には、開顯といふ事が無くてはならぬ、この開顯といふことは詳しく申せば、破、廢、開と申して「開」といふ字の前に先づ問題つたものを「破」り、「廢」て、さうして採るべき所、活かすべき所は活かして行く、而して更に完全なるものを打立てるといふやうに、教を定める前に於て餘程嚴密なる批判と言ひますか、取捨選擇を掘り出すといふやうな粗末なことはいかん。其處に在る教なり思想なりを開顯して「此處はいかん、此處は先づ採つて使へる、此處は捨てゝ善いものだと言つて孤立的にその小さな考へを仕舞はなければならぬ」といふ事を、餘程嚴密なる意味に於て判斷しなければならぬ。又その判斷をするのに、それに標準があり、中心があり、それを判斷するだけの識見があつてやらねばならぬと云ふやうなことでありまして、即ち社會改造論といふことに就て言ふならば、色々の思想を破廢し、開顯して、能く吟味してかゝらなければならぬ。唯今山川博士のお話にもあつたやうに、輕々に異邦の文明に屈從するとか唯だ未熟な研究を漫りに發表するとか云ふやうなことは、これ皆な小乘教とか權大乘教とか云ふやうな態度であつて、日蓮が言ふ日本國に打立てる實大乘教の觀念に背いて居るものである といふ事は、日蓮主義者が何人も總ての主張を發表する以前に心得て居るべきことであります

又「機」といふ事は、我が日本國民は「醍醐一實の機」とも申し、或は「本門の直機」とも申して居りますが、これはどう云ふ意味合ひか

と云ふと、一番善い所のものを皆な同じやうに信ずる國民であるといふことであります。「俺は淺くとも自由である、粗末なものでも勝手にやる」といふやうな自己自決といふやうな事を云つて、個人々々の考へを本にして、樣々なる思想を採つて人心の分裂を來たすといふやうな事は許さない。日本人は十分に自分の立場をも理解し、大和民族の天職をも考へて、さうしてその自分が奉持する所の思想の根據といふものは所謂古今に通じて謬らず、中外に施して悖らず最も完全なる理想を採つて行かなければならぬ。それだけの人の寄つて居る國である。即ち一實の機といふ言葉は、佛敎の言葉で言へば偏、權或は圓、雜といふやうなことに反對した言葉である。「偏」といふのは、かたよるといふ事、「權」といふのは一時といふ事、「圓」といふのは粗末な事、「雜」といふのは混雜して居る事である。さういふ偏つたり一時的であつたり、粗末であつたり、混雜して居つたりするやうな、そんな思想は日本人は持つべきものでないと云ふ事を前提として居る。「私は私です」とか、「私が好きでやるのですから」とか、そんな事はいかん、日本人の自覺の下には、それだけの完全を意味したる敎に依つて立つべきで、政治家もその考へを以て日本の國民を指導し、宗敎家もその考へを以て國民を指導しなければならぬ。デモクラシー、デモクラシーと言つて見た所が、唯だ自分がえら、い〳〵と言つて見た所が、醉ばらつたやうな頭ではいかん、本當にえらい國民といふのは、もう少し打込んで行かなければならぬ、醉ばらい的デモクラシ！は日本人の採るべき所でないと考へる。煽てられたやうな事を言つて喜んでワイ〳〵云つて居ることは駄目だらうと思ふ、眞にデモクラシーといふならば、日蓮が言ふが如くに、日本人は悉く醒醐一實の機根であるといふ程の觀念に立たねばならぬといふ事を主張する者が日蓮主義であります。又「國」と致しましては、最も秀でたる敎が現れ出る源の土地であるといふ事を信じて居る即ち「日は東より出でて西を照す」が如くに世界を光被する程なる偉大なる思想、偉大なる敎が日本より發現する。日本の一番えらい所は、最後世界の人心を指導するに足る敎化の大本を我國より打立てるといふ處にあるのである。形の上に於て言へば太陽が總ての物を照すが如くに、精神の內部に對して日と同じ光明を發射するものが日本より出るといふ信念に依つて、國を觀て居るのが、日蓮主義であるのであるから異邦の文明に屈從するといふことは、第一の禁物である。異邦の文明を尊敬するとか、異邦の文明を學ぶといふことは無論差支ないけれども心の根本までが顚倒して、叨りに日本の國を侮り、徒らに外來の文明に心醉するといふやうな觀念を持ち、自ら屈して無闇に他を善いやうに思ふのは間違つて居る。今日の我國の思想言論の中には、東洋文明の眞價を味はずして、輕卒に歐米のなま煮への思想を謳歌し、所謂心醉して居る者が少なからず存して居るのは事實である。それは甚だ宜しくない、彼等の文明を尊敬するとか、或はそれを採つて參考にするといふことは當然の事であるけれども、了簡の根本が自ら日本を侮つて掛るといふやうな根性といふものは、全く我國を理解しない者である。我國の事を讀めればそれは慢心であるとか固陋であるとか云ふが、慢心でも固陋でもない、日本には確かにさういふ天職があるといふ自覺を持つことが、眞正なる大和民族の觀念であると私は考へる。それを知つたか振りして嘲るといふやうな者は、全く我國を知らない者の言ふことである。又事實將來我國は、必ず世界にそれだけの偉大なる文明を供給するものなりと信じて居るものが日蓮主義である、決して慢心などと云ふものではない。又今日の樣子から考へてもさういふやうに成行くことが、そこに幾分か認められるのであります。それから「時」といふのは、時勢の變遷でありますが、日蓮聖人の考へて居る時勢は、善く成ると思うて居るのである。一般佛敎の考へ方は、末代の世は次第に惡くなつて、それきり衰へてしまふと思ふて居るけれども、日蓮聖人は末法の時に至つて更に偉大なる光を發するといふことを信じて居られるので、「月は春よりも夏、夏よりも秋、益よその光が明らかになるが如くである」といふ所に、日蓮の時勢觀なるものがあるのであります。さ

うして『撰時鈔』といふ書物を作られて、今日の時勢は最も善き敎が起り、最も善き働きが起つて來るのであると言つて、前途に非常な希望を有つてこの時代を觀て參りました。故に古人は尊ぶのではありますけれども、事每に唯だ古を模範とするばかりでなく、更に新らしい偉大なる文明を開拓して行くべき事を日蓮聖人は主張致しました。聖人は天台、傳敎を尊敬し、龍樹、天親を尊敬しますけれども、併し門弟子に敎ゆるに方つては、「龍樹、天親にも超へ、天台傳敎にも優るやうな人に成つて行けよ」といふ事を言はれました。これは先聖を輕蔑するとか慢心といふ事から出るのではなくして、前途に偉大なる活動を爲せよといふ覺悟を促したものであります。それ故に日蓮が考へました時代といふものは、餘程前途有望なる時として考へました。故に傳敎の正像稍や過ぎ已つて、末法太だ近きにあり。（木尊鈔九四八）

といふ言葉を引いて、「末法太だ近きにあり」といふことは、傳敎大師が末法を繼ひさせ給ふことである。「もう今直ぐ末法が近付いて居るのに俺は少し早く出た、あゝ飛んだ事をした」と言つて居られるのである。顧れば日蓮の生れて居る時は即ち末法である、如何にもよい時に出て來たと言つて、聖人は自分の時を喜んで居ります。又聖人の敎は時と共に推移して、最もその時代に適應することを理想して居りますから聖人の言葉としては、千經萬論を習學すれども、時機相違しぬれば驗なし（佐渡御書九二八）

といふ事を言ひました。どれ程澤山お經を學びて論釋を研究致しましても、時機といふものに對する觀念が謬つて居つたならば、何の役にも立たないと言はれて居る。それでありますから日蓮主義は決して唯だ保守的の固陋なことばかりを言ふのではありません。併ながらその時代と共に進み行くと云ふに就ては、今日の多くの改造論者が云ふやうな根據の無い、輕卒な事を採るものではありませぬ、總べてその進み行くに就ての思想の根據と云ふものは、餘程確實な所に打立てられて居ると思ふのであります。尤も今回の平和克復の大詔の中にも『隨時順應』と云ふ言葉をお示しになつて居ります通り、無論我國に於ても、我が國體の趣旨も、唯だ古きを辿つて固陋に陷るといふやうなものではない日本の國は何處までも矢張り「疊坂のぼる」で益々發展發揚して行く國家でありまして、維新の五箇條の御誓文の中にも、開國進取の國是をお立てになつて『智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし』と宣はせ給うた通り、世界の智識を吸收して我國の文明を完成して行くといふことは無論でありますけれども、その進み行くに就ては、餘程愼重なる態度を以て行かなければならぬのであります。それ等の事は無論日蓮主義者が總べて聖人の敎訓に導かれて、考へて居ることで、日蓮主義者は決して固陋な者でもなく、輕卒な者でもない、堂々として世の進運に應じて敎化を開かうとして居る者である。

次に「序」といふのはどう云ふ意味かと云ふと、過去に既に我國の文化は、大なる敎が打立てられて居るのである、建國の始めよりして既に我國には神ながらの敎があり、應神天皇の時から支那の文明を吸收して、聖賢の敎がよく我國の文明に融合して居る。又欽明天皇の時から印度の文明を代表して居る佛敎が來て、益に高僧碩德輩出し、この偉大なる佛敎をば能く日本の國に適合するやうに弘められて來て居るのであります。神ながらの敎は古いとか、儒敎は斯う改造しなければならぬとか、佛敎も改造せんならぬといふ聲も段々ありますけれども、その改造論の內容を見ますると、實に驚かざるを得んやうな事が書いてある、改善やら改惡やら、寒とぼけやら、譯も分らんで、何でも改造々々と言つて居る。今も私その書物を見て驚いた、今晩の講演もありますから、使を遣はしてその書物を買ひにやりまして、一寸見ました所が、佛敎に就ての改造意見といふものがある、何が書いてあるかと言へば、第一佛敎の熟字がよく分らんから、もつと分かるやうに改良して貰ひたいと云ふことである。それから第二は坊さんの間に階級があるさうぢやが、そんな事はやめたら宜からうといふ事である。今一つは何か戒律の事を、却つて昔のやうに嚴重にやつて、坊

さんは皆なお粥でも啜つて居つたら面白からうといふ事が書いてある、この三つである。之を以て今日の佛教を改造せざるべからずと言つて佛教改造論などと言つて居る。佛教の事など何も知らぬ者が寄つて、「いや佛教は改造しなければならぬ」「どう改造するか」「先づ戒律を守らんければならん、坊主の階級などはやめたら宜からう、どうも坊さんの言ふ熟字が難かしいから眞如とか如來とか云ふやうな事は改めて、眞如は眞理にしたら宜からう、如來は神樣と云ふ事にしたら宜からう」と云ふやうな事を言つて居る。左樣な淺薄なる事を今日は言ふべき時でなからうと思ふ、我國の過去の文明は、もつと偉大なる學者もある、もつと偉大なる思想家も現はれて、もつと進んだ宗教とか道德とか云ふものが我國に存して居るのである、然るにも拘らず左樣な薄つぺらな片々たる事を言ふと云ふのは、日蓮の許さゞる所である。淺いものから深くなつて行くのは宜しい、粗末な思想が段々立派になるのは宜しいけれども、立派に開發されて居る文明を貧弱にし淺薄にして行くといふ事は第一間違つたる無駄事であると日蓮は申しましたが、この見解の下に今日の思想を見ますと云ふと、その大部分は無駄な論である、言はずもがなの事である、もつと我々の先人が開發して呉れた文明の方が偉大であるといふ事を、思ひ當ることが多々あると私は思ひます。

無論歐米の文明を吸收して進んで行くといふことは、前にも申した通り論の無い話でありますけれども、偏傾して居る小さな思想と云ふものが、割合に歐米には多いのであります。大體に於て歐米の思想は偏傾的の通弊があると申して宜いと思ふ、その近い例を申しますれば、幾らも現はれて居ります、今亞米利加が非常に過激派に惱んで居るやうであります、露西亞が革命を遂げました時分に、亞米利加からは非常な祝電を贈つて居る、さうして何か日本の國風などに當てこするやうな事を言うて、當時私は非常な嫌やな感じをしたことがある。所がもうこの頃は、過激派といふものは第一の禁物で、皆な引つ捕へてそれを放逐するとか、一年過たぬ中に、先きに祝電を贈つたその事柄を、今日は引つ捕へて放逐といふやうな事をやつて居る。デモクラシーの事も、この間まで大分盛んでありましたが、この頃では「デモクラシーの破綻」とか、「デモクラシーの失敗」とか、「デモクラシーの鍋ひ」とか云ふやうな字が段々現はれて來ました。この間までは「デモクラシーならざるべからず」であつたが、今日は「デモクラシーの破綻を知らずんばあるべからず」といふ事になつて居る、洵に壽命の短かいものである。これは日本でさういふ工合に成るのではない、西洋でさういふ傾きを採ると、日本ではその受寶をして居るのでありますから、問屋がさういふ風に品物の製造が變はれば、小賣店も亦變つて行くといふに外ならぬのであります。斯樣なことは日本人はやつてはならぬ、日本人の恥づべきはその點である、一旦先人の開拓したる偉大なる文明を貧弱にし、淺薄にするといふ事をしてはならぬ。學問を發表するとか、意見を發表するとか云ふに就ては、先人の文明よりは更に一段進んだものを發表するといふことは宜しいが、貧弱にするといふやうな無駄事をしてはいかん。稼いで親の身上を殖やすのは宜しいけれども、稼いで減らす、商賣をして店立てを喰ふと云ふやうな事は、愚か者のすることである。今日は非常に學者が學問の獨立とか、學者の地位といふことを言ふ、成程學者は尊敬すべきであるけれども、その發表する學問の內容の淺薄といふことの責任はどうするか、學者といふ者は尊ぶべきものだけれども、粗末な事を言うても宜しいと、云ふことはない。思想は自由であるからと言つた所が、詰らぬ事を言うて坊主ならば坊主が說教するのは自由だと言つて寢とぼけた事を言つたらどうするか。さういふやうな下らぬことに力を入れるよりも、もう少し落ついて研究を積んで、大いにその思想を開發し改善するといふ眞面目な努力をしなければならぬと思ふ。今日言うて居る事は多く嘘つぱちである、東洋の文明なら東洋の文明に就ても、もつと知る所が無ければならぬ、今申す通りこれは一例であるけれども、佛教改造なら改造といふ事に就て、唯だ坊さんの階級がどうぢやと

か、以前通りお粥でも食つて見たらどうぢやとか、まるで茶番狂言のやうな事を云つて居る。而かもそれが博士の言ふ事である。今日の言論は殆どそれに類するやうな事が多いといふのは日蓮聖人の所謂「一惡鬼その身に入つて本心を失へる」が故に、斯の如きことになるのではないかと思ふ。所謂たゞ事とも思はれない、全く白面書生の未熟な觀念と同じ事をヒョイ〳〵言うて居るやうな事で、もう少し愼重に考へて行かなければ、この文明を完成して行く順序が立たぬと思ふ。

この五大要綱に依つて日蓮主義は總ての問題を判斷して行くのでありますから、この原則から社會改造論といふものを觀る時に如何なる判斷が下るかといふ事になるのであります。そこで第二段に移つて、

二、人生社會の存立

といふ事に就て私の考へを少し申して見たいと思ふ。この「人生社會」といふものは、斯樣な言葉を使ひまするけれども、畢竟これは人心の投影したる所のもので、人間の心を除いては人生社會といふものは存しないのである。社會が惡いといふ事は、其處に居る人間の心が惡結果である、社會が善いといふ事は、その人間の心の善い投影でありますから、さうするとこの社會といふものゝ存立して居るのは、人の心の上に組立てられて居るものに違ひない。又外から之を觀たならば、今日の文明組織といふものは、矢張り國家的組織の中に文明といふものがあるのである。國際聯盟にした所が、社會聯盟ではない國際聯盟である、國と國といふものが聯結して、世界の文化を維持して居るのが事實である。國といふものを離れて社會といふものは存しないのである、國の中に在る或る部分の事柄を社會といふ言葉を使つて居る。以前は餘り使はないで濟んだ、こんな言葉は出て來なかつた、近頃それが頭を持上げて、何か國家の外に社會といふものがあるかの如き考へに依つてワイ〳〵云ふのである。何も社會改造などと言はないでも國家の發達といふ言葉で宜かつたのである、國家を理想的に完成して行けばそれで宜い、それを何か別な物のやうに思うて、國家といふ事を暫く忘れてしまつて、國家の發達といふことはそつち除けで、社會改造といふやうな事を云ふけれども、同じ物である、私はさう思ふ。それは西洋の文明の中の思想が變化を來たしたから斯樣な言葉が勢力を得て來たのであるけれども、其處が抑く考へ違ひであらうと思ふ。社會なるものは國家組織の中に存立し、國家に依つて制約されて行くべきものである。又社會それ自身、暫く國家といふことを離れても、社會それ自身の目的あるものは、共同生存の意義を徹底するといふ事である。社會といふ言葉は仲間とも言ふのであるから、仲間といふのは大勢人間が寄つて生活して居る、それが共々に善いやうにと云ふ事でなくてはならぬ。多くの社會主義者などが社會主義といふ言葉を使ふけれども、彼等の言ふ主義は、自分勝手の考へで、社會主義ではない、打つ倒し主義である、我が身勝手主義である。眞の社會といふものゝ原則を言へば、共同生存で、共に宜いやうにして行くと云ふ事であるから、共に宜いやうにと云ふには色々の方面を整頓して來なければならぬ、唯だパンの配給とか階級の戰爭とか云ふやうなことでは、全體の調和進歩といふものが無い。それは少しの事をやつても直ぐ色々の役割といふものが出て來る、例へば飛鳥山に花見に行かうといふことになれば、花見に行くには唯だ弁當食つて酒を飲んで、鉢卷して踊つて歸つて來るだけであるそれぢやア皆な弁當を持つて行つて、勝手に跳ねて遊ぶかといふとさうは行かない、やはり先きに行つて場所を撰定するとか、或は毛布をとつて行つて共處等に敷くとか、電車に乘れば電車賃を拂ふ者とか、向ふに行つて火を起す者とか、後とで弁當代の勘定をする者とか、錢を立替へて拂ふ者とか云ふやうな者がそれ〳〵無ければならぬと云ふ事になつて來るから、唯だ簡單に弁當を持つて行つて、「食つて」「跳ねて」といふ譯には行かぬ、一つの花見をするに就ても色々の役割といふものが出來るのである。社會といふものは今日の人の考へて居るやうに、唯だ簡單な問題を以ては、全體の幸福を保全する

ことは出來ない、共同生存を全うせんとするに就ては、凡そ今迄の文明の持つて居る總ての事は、何れも無用のものではない、それが正當なる均衡を保つて共々に完全に發達して行くといふのが、穩健なる思想であります、其處で社會なるものは、內は人の心に依つて打立てたら、外は國家に依つて制約せられる。さうしてそれ自身の目的は共同生存にあるといふ事を原則として考へなければならぬ。この三方面の考察を忘れての社會問題とか、社會改造論といふやうなものは皆な失敗である。人の心を考へず、國家の組織を考へず、共同生存の意義から脫け離れたやうな議論は、總べて誤謬にして根據なき夢であるといふことを斷定して宜からうと思ふ。

斯の如くこの社會なるものは人の心に依るといふことが明らかになつた以上は、社會の健全なる發達はその人の心を教化し善導すると云ふことが根本問題である。パンの配給などと云ふことよりも、社會を構成するのが人の心であるから、その人の心が善くならなければならぬ、その人の心を善くすると云ふに就ては、教化の大本所謂教へといふものが打立てられなければならない。若もこの教化を輕んじ、教化の大本といふものを捨てゝ、さうして社會改造といふ事を說くならば、それは全く誤謬である。又社會は國家の中に制約せられて居る現在の文明であるが故に、國家の健全なる發達といふことを忘れるとか、後とに廻はすと云ふやうなことで社會改造を說く者があつたならば、これ亦事實に合はない空想である。その空想を實現したるものは露西亞である、國家を後に廻はしたり國家を輕んじて社會の改造をやつた結果どうなつたかと言へば、非常な困難に陷り、昨今の新聞を見れば、その都モスコーに住んで居る人は最早や過激派に依つて幸福は得られぬ、英佛軍に依つて救濟は得られん、自ら立つ力は無い、もう死を待つばかりである。食料は無くなつた、寒いけれども火にあたれない、燃料も無くなつた、飯が食へない、「こんな事なら生きて居るより死んだ方が宜しい」と皆な言つて居るといふ事が新聞にある。その國の都に居る人が皆な死んだ方が宜しいと云ふやうになつたならば、この位烈しい困難はなからうと思ふ。それは何故さういふ事になつたか、國家を忘れて唯だ社會改造を叫んだ、その失敗が眼前に現はれたものである。どの國でもやつて御覽なさい、國家を忘れて社會改造など云ふやうな事ばかりに熱中して居ると、皆な今日の露西亞と同じやうに「死んだ方がましぢや」といふ結論に達するのである。洵に明白である、何も學問があるも無いも要らんぢやないか、事實が其處にそれを證明して居る、「論より證據」といふことがある、死んだ理窟を見るよりも活きた適例が幾つもある。であるから國家を忘れた社會改造論ナンといふものは、價値の無いものである

又社會の結合は共同生存といふことが原則であるから、それには「互ひに宜いやうに」といふ相互の事を考へて行かなければならぬ、若しも各個人が自己の權利利益といふことのみを重く視ることになると、相互の共同幸福といふことが無くなる。共同生活とか共同の幸福といふことは、自己の權利利益といふ事を制限して掛かることが原則であらねばならぬ、自己の權利利益を一番尊いものぢやと言つたならば、決して共同和協の社會を造り出すことは出來ないではないか、それ位の理窟の分らぬ者は馬鹿である。何をやつても先づ自己の權利々益を極端に主張することになつたならば、落付くものではない。僅かの事で紛擾が出來ても、その間に仲裁に這入つて斡旋をするといふやうな場合、例へば相撲なら相撲で縺れが出來て、行司が捌くといふやうな場合でも、僅かの事でも兩方が同じ事を突つ張つて、頑として自分の主張を曲げなかつたならば、夜が明けても片附かんぢやないか。けれどもその間に讓歩するといふ所があつて、其處に調和點が發見されるのである。一切萬端唯だ自己の權利利益を主張するといふことが一番大切だといふやうな事に成つたならば社會は唯だ衝突あるのみである。

然るに或る者の如きは、反抗とか爭鬪といふ事を以て社會の進歩である、それに依つて社會が發達するのであると言つて、社會發達の力を反抗に置き、爭鬪に置いて居る。これはマルクス

などがそれである、クロポトキンなどもそれである、今日の先づ新らしがつて居る急進論者の思想の根據といふものは、危險思想と同じものである。唯だ行き方が直接行動であるかないか國家まで認めんで攻擊するかせないかだけであつて多く勞働運動でも社會改造論でも、結局は撲倒せとか、造つつけろとか云ふやうな事を言ふ、それは總べて間違つて居る。少くともさう云ふ事を言ふ者は、或る意味に於ては危險思想である。どうしても社會人生は、聖德太子の言はるゝ如く「和を以て貴しとなす」で、互ひに人心が和らいで、相扶けやうといふ慈悲とか仁愛とか云ふ共同和衷の精神を以て、所謂「旅は道連れ世は情け」といふ風に行かなければならぬ。それを「世の中、學問で撲倒せ」といふやうな事に今日は成つて居る。さう云ふ觀念を事實に現はして、例へば國家を破壞するとかせぬとか、階級戰爭をするとかせぬとか言はぬでも夫婦の間でも兄弟の間でも、「己れ」「貴樣」といふやうな言葉ばかり考へて居つたならば、其處で一切の危險といふものが胚胎する。抑もこの觀念が現代を鴉ひする所の根本をなして居ると私は思ふのである。

それであるから左樣な反抗とか爭鬪といふことを是認するならば、直ちに修羅の街が現はれ畜生の世と成る。修羅は何時も喧嘩をして居る修羅は爭鬪を事とし、畜生は殘害を事とすと言つて、所謂短かきは長きに呑まれ、小さきは大きな奴に喰はれるといふ事になつたら仕樣が無い。さう云ふやうな工合に人間が行くから、民族自決であるとか、色々の事を言つて見た所が互ひに反抗などと云ふ事を道德としたならば、喰合ひが始まる。大體をかしいではないか、今日は民族自決であるとか、或は國際聯盟であるとか言つて、今迄戰爭をした國際間さへも、平和に行かうと云ふに、一國內に於ける所の賣本家とか勞働者とかいふ者が喧嘩でよいといふ理窟が何處にあるか。同一國民ではないか、それが產業問題に就ては喧嘩が當り前である、國際の間には聯盟を作らんならんナンといふのは實に矛盾の甚しいものである、何處迄も國際の間も平和を尊重するのは無論結構な事である、唯だ今日の問題は果してその平和が維持されるか否やといふ點に存するので、平和といふ事は反對する理由は一つも無いのである。隨つて產業の問題に就ても、反抗とか爭鬪とか云ふことを勞働問題が是認するといふが如きは誤謬である。新聞などがさう云ふ事を皆な書いて居るけれども、それは考へが足らぬと思ふ。尤も左樣な事を書いて居る新聞でも、半月も經つと又變つた事を書き居るのであるから、首尾一貫せぬものである。左樣な事を書き居つた新聞が、近頃大分變つて居るのは、餘程面白いことであると思ふ。

（未完）

平和會議所感

法學博士　山川端夫

私は唯今御紹介を受けました山川であります昨年巴里に此の五年の大戰爭を終結する爲めに講和會議を開かれました折に、日本の全權の隨員として觀たる外國の狀況を少しくお話したいと思ふのであります。直接宗教上の話ではありませぬが、併し世界の大勢を知るといふ上に就て、聊かでも御參考になれば大變仕合せと思ひますし、又日本の將來の上から見ましても少しく考へる所がありますから、特に今回開會致した講和會議を通じて觀たる所感を申述べたいと思ふのであります。

その前に講和會議當時の歐米の國民の狀況はどうであつたかといふことを、一言申上げた方が宜からうと思ひます、詰り講和會議の起つた事柄の前提になるものでありますから……。講和會議の始まる當時に於きましては第一に歐米の人心は非常に戰に倦んで居りました、戰爭

中は御承知の通り各交戰國ともに全力を盡して戰をしました、日露戰爭に日本が國力を擧げて、擧國一致で戰をしたといふことが、餘程その後諸外國の人心を刺戟しまして、戰爭前から擧國一致といふことがどうしたら出來るかといふことに就て、各國の政治家若くは識者は非常に注意して居つたのでありますが、その結果が今回の大戰爭に於きましても十分現はれました或は戰爭のやり方に大小がありますから、今回の有樣だけを見ますといふと、自然日露戰爭以上に各國民は擧國一致、本當に犧牲心を揮つて國の爲めに總てのものを擲つといふ實を示したやうにも觀察されるのであります。それで各國に於きましては上流社會、下流社會を問はず——寧ろ上流社會の方が自ら進んで下流社會を導いて、彼の戰爭をしたと言つても宜い位であります。英吉利でいへば無論さういふ風な狀況がありますが、又佛蘭西でも、能く戰前に彼國を通つた人は、極く墮落した人民であるといふやうな評をして居りましたけれども、兎に角彼の獨逸の大軍を五年間西部戰場に引受けて防ぎ切つたといふのは、佛蘭西の兵隊が根柢を成して居る、詰り非常に强い、非常にえらい昔の勇武な佛蘭西の氣象を此處に現はしたのでありまして、餘程戰前の思想とは違つて居ります。それから獨逸になれば尙ほ一層その狀況は甚しいのでありまして、英吉利の大海軍の爲めに國外との交通は總て絶たれてしまひ、國內に於ては糧食の制限や色々な物資の制限を極端まで行つて、やつとあれまで保てたのであります。現に先日獨逸に入つた日本の有力家の觀察談を聞いて見ますと、大きな町ほど食糧が缺乏して居る、その爲めに今日は子供が十分育たない、死亡率は無論多い、のみならず學校に於て教育しても頭がぼんやりして馬鹿になつて居る爲めに、多數の者は教育を受ける力が無いといふやうな憐れな狀態になつて居ります、さういふ狀態に至るまでも國の爲めにやはり戰をしたのであります。敵國を讃めるといふ趣意ではありませぬが、兎に角敵も味方も全力を盡して戰をしたといふことは明かなる事實であります。所が一旦休戰といふことになると、今まで耐忍んで來た力がすつかり拔けてしまつた、戰の間は兩方ともに眞面目にやりましたけれども、休戰といふ聲を聞いてその力が拔けてしまつて、モウ戰をする考は無い、成べく早く戰を止めて平和に復したいといふやうな希望を一般の者は非常に深く有つて居りました。それであるからどんな事があつても今更再び戰を始めるといふやうな考は、一般の人民は持つて居なかつたのであります。

それからモウ一つの點は、歐米諸國に於きまして經濟上の組織等が、從來の組織が不完全で、下層社會の主に勞働者が、自分の生活上の欲求を充たす爲めに色々な要求をする、賃銀を上げて貰ひたいとか、或は生活狀態を改良して貰ひたいといふやうな要求が段々多くなりました。それは戰前にもその運動は既に餘程力强いものであつた、英吉利に於きましては御承知の通りに戰前には殆ど勞働問題に就て行詰つて居つた、一方には勞働者等に於て職業に就くことが出來ない者が非常に殖えその處分にも非常に困つて居る、一方勞働者の方では色々な要求を致しまして、資本家との間の爭ひがどうもうまく解決が附かないといふ、實は窮境に立つて居つたのであります。それが戰爭になつてからも暫く續きましたが、今の總理のロイド、ヂョーヂ等の盡力に依りまして、兎に角擧國一致で獨逸の軍國主義を倒さねばならぬ、それには暫くの間戰爭を進める爲めに勞働問題の爭ひを中止する必要がある、併し唯止せといつて止す譯には行かぬのであるから、それを解決する手段として一つの途を講じたのであります。それは勞働者、資本家から各々代表者を出さして、それに政府から出て居る代表者が加はつて、勞働問題の爭ひがあつた時にそれを最後に審判するといふ組織を作つて、この戰時中は勞働問題を兎に角餘り極端まで進めずして、戰を繼續することが出來たのであります。それで先程申上げますやうに、各國の上流社會は自ら先きに進んで戰を致しましたけれども、兎に角多數の兵隊となる者は下層社會の人が多い、それが戰に出て國の爲めに貢獻したといふことで、歸つてからそれに對する報酬といつてはをかしいですが、まア報酬を非常に要求するといふやうな狀態になつて居る、それで勞働問題も或は純然たる勞働問題だけに止まらずして進んでは政治權を得たいといふやうな希望を現はすやうな狀態になつて居る。それで一體に歐米諸國に於ける人心が極めて不安定で、不安を來して居るといふやうな現狀であつたのであります。

それからモウ一つ注意すべき點は、戰爭の爲めに財政上、經濟上非常な困難に陷づたといふ點であります。戰の爲めに敵味方兩方の費した費用を先づ概略合算しますと三千七百億圓であります、細かに勘定するとモツと多くなるかも知れませぬが……、聯合國の方で費した戰費が先づ二千百億、敵國の方で費したのが千六百億といふやうになつて居ります、その數だけ聞いても隨分大きなものであります。その上に聯合國の方では主に自分の領土內で戰鬪があつた爲めに、產業の組織を壞されてしまつた、獨逸は殊に佛蘭西の北の方を占領して居ります、この北の方に佛蘭西の工業其の他の產業が非常に能く發達して居る、佛國產業の中心は寧ろ佛蘭西の北部に在ると謂つても宜い位であります、其處を獨逸が占領して、戰後佛蘭西が容易く恢復が出來ないやうに、總てのものを破壞してしまつて居るといふやうな狀況であります、それ等のものを恢復するといふことすら餘程困難である、その上に敵に占領されない所でも、普通の工業は出來るだけこれを制限して、軍需品を造る爲めにそれを用ひて居つたので、それを復舊するといふ必要もあります。さういふやうな經濟上の點から言つても餘程困難な狀態に立至つて居つた。

その場合に講和會議が開けたのであります。それでウイルソンが十四箇條の原則を陳べ、其他度々同じやうな原則を述べて居つたことがそれ等の困難に陷つて居る所の各國の人民の頭に非常に能く響いて、各國共にウイルソン十四箇條といふものは全く神のやうに歡迎したのであります。さういふ狀況でありますから、今度の對獨講和條約の中には、獨逸に課すべき條件以外に、戰爭に直接の關係は無い所の國際聯盟とか、或は勞働問題とかいふ問題を掲げるといふことになつたのは、それが一つの理由であります。

それでウイルソンの十四箇條（これは十四箇條ばかりではありませぬ、その後ウイルソンが展よ講和會議に於て標準とすべき原則を擧げて居るのでありますが）この十四箇條を今度の講和會議の原則とするといふことに就ては、敵味方も既に承知したのであります。詰り一昨年十一月獨逸が休戰を申込みます時に、ウイルソン十四箇條の原則に依つて講和をしたいといふことを申込んで來て、聯合國の方ではこれを認めて、そのウイルソン十四箇條が原則になつて講和條約といふものが出來上つた形式になつて居ります。成程このウイルソン十四箇條の理想は兎に角理想としては非常に立派なものである、今までの各國が人の國を取り、强い國が弱い國を虐めるといふやうな遣り口を變へて、正義人道に依つて進んで行かうといふのでありますから、非常に耳觸りは良いのであります。所がそのウイルソン十四箇條が講和會議に於てどういふ風に取扱はれたかといふことは、日本人として大いに注意すべき點であらうと思ひます。ウイルソン十四箇條は無論主義として各國が既に之を贊成して居るのでありますから、之を主義として各國共に贊成したのは無論であります、併ながら講和條約の各條項をズツと眺めて見ると、このウイルソン十四箇條といふものは、各國が豫め非常な勢ひで贊成したに拘らず、その趣意といふものは必しも出て居ないのであります、詰り各國の政治家或は識者が講和條約を議するに方りましては、空な理想だけに據らずして、自分の現實の社會の狀態がどういふ風になつて居るかといふことを、始終念頭に置いて仕事を進めて行つたのであります、詰り始終足許を見て居つたのであります、理想といふ天井ばかり見て行くと、或は池の內に落ちるかも知れぬ、各國の政治家等はさういふ愚を敢てしない、理想は理想として見て居るが、同時に自分の足許はちやんと見て居つたのであります。

ウイルソン十四箇條は色々なことになつて居りますがその主なる事柄を一二擧げて見ますと

その事が能くお分りになるだらうと思ふ。ウイルソンの主張の國際聯盟といふものが出來上つて、將來は各國共に成べく戰をせずして、國際間の爭ひがあつた時には平和的にこれを解決して行かうといふ組織だけは出來上つたのであります。それから又軍備を制限して行きたいといふその主義だけは、國際聯盟の規約の中にも既に認めて居る、併しこれは唯主義を認めただけで、どういふ風に制限するか、軍備をどういふ風に將來持つて行くかといふことに就ては、未だ具體的の話は何等極まつて居ない、これは將來定まるのでありますが、何時になつて定まるか、今日に於ては未だはつきりその事を確定的に申上げることは出來ないやうな狀況に在るさういふものは定まつて居りますが、併し今後國際間に於て最も問題となり得べき點は、經濟上の障壁を撤去するといふウイルソンの理想原則であります、經濟上の障壁を撤去するといふことは、例へば或る國が非常な原料を持つて居る、その原料を自分の方にばかり取つて、人にやらない、或は獨逸が戰前にやつたやうに、自分の國で出來たものを外國に賣る時には極く安く賣る、さうして競爭を以つて他の國を倒す或は自分の國に外國から物を入れる時には、他國の產業の發達を阻害して自分の國の產業のみが發達するやうにといふ、さういふ考で總ての事柄をやつてはいけないといふのが、ウイルソンの理想であります、その理想などは今回は終に審議されなかつた——審議はされましたけれども、それを實行するといふ程度には行かなかつた。この問題は經濟上の問題でありますけれども、今日のやうに國が經濟上の關係で立つて行く場合には、極めて重大な關係を持つものであります。英米のやうに總ての原料を有し、總ての工場を有して、自分で自營自給が出來るやうな所ならば一向差支ありませぬが、併しその他の國は殆どすべてさういふ狀態でない、佛蘭西にても、伊太利にしても、日本よりもその點に於ては尙ほ不利な狀態に在る。さういふ事がありますから、一國のみが利益を得やうといふことになれば、どうしても他國は自國の利益の爲めに之に對して爭ひを起すといふことは已むを得ないので、將來の國際間の問題といふものは、さういふ點に於て大いに面倒な關係を惹き起すだらうと思はれるのであります。併しそれ等の問題は、ウイルソンの理想に拘らず、今回は何等決定することを得なかつたのでありますが、ウイルソンの理想に關聯して領土と民族自決といふやうな問題、これは、他人の領土を取らないといふ問題がありますが、領土を取るといふやうな事は舊式なことであるから、領土を取らない、又國民は民族の如何に依つて、同一の民族は成べく同一の處に集まつて國を組織せしむるといふ、理想としては誠に完全なものでありますが、それ等の問題に就きましても、唯敵國の領土を處分する場合だけその原則を適用して居る。獨逸の領土をどういふ風にするかといふ時には、何時でも民族自決といふ問題を持つて來る、詰り獨逸の國內にも大分異民族が澤山ある、東の方にはポーランドの民族があり、それから西の方には佛蘭西のアルサス、ローレンをこの前奪つた、これも佛蘭西人の方が比較的餘計に居る、それから丁抹から一八六〇年に取つた舊丁抹の領分、さういふものを獨逸から取つて舊に戻さうといふやうな場合には、何時でも民族自決といふ主義を適用したのであります。それから又墺地利のあの多數の民族が集りて居る國をどういふ風に始末するかといふ時には、獨逸民族は獨逸民族で小さくなつて墺地利の國を形作り、今の墺洪國中の匈牙利は匈牙利で別になり、「チエコ、スロヴアツク」の民族はやはり「チエコ、スロヴアツク」で一つの民族の國を造らうといふ風に、敵國の領土を處分する際には、民族自決、領土を併合しないといふやうな主義を適用したのであります。併しその理想を完全に實行しやうとするには、敵國の領土のみに止まらずして味方の國にもこの問題は非常に影響があるのであります、世界の四分の一の面積を有つて居るといふ英吉利に於きましては、最もその關係が多いのであります。日本の領土は極く僅かでありますが、それにしても朝鮮、臺灣といふやうな問題も起つて來ます、朝鮮人が近來騷いで居るのはやはり、それ等の事情が分らずして、民族自決といふ非常な立派な理想が振翼されたので、何處でもそれが出來るといふ風に考へて居るのが、今度の騷動の一番の源であります。さういふ關係がありますが、味方の方にはさういふ問題はすべて適用しない。是等は確に私が前に申上げました所の、各國政治家がウイルソンの理想を取扱ふのに、自分の足許を見て進んで行つたといふ點でありまして、自分に工合の悪い所はソツとして置く、敵の領土を處分する時にはその美名で押へてしまふといふやうな實際の有樣であります。

その他さういふ色々な原則の事を一々細かに申上げますれば大變長くなりますから、先づ一二の例としてそれだけにして置きますが、それで將來の平和を維持し、戰爭が起らないやうにする爲めに、國際聯盟といふものを造つた、これも理想としては非常に立派なものでありますが、併ながらこの國際聯盟の根本の趣意は、各國民がお互に信賴して、お互に自制して、戰爭をせずに進んで行くといふことを考へなければ——さうしてそれを基としなければ國際聯盟といふものは出來るものではないといふのが、根本の考へになつて居ります。今日では一部の論者が言ふやうな、國の上にモウ一つ權力のある國を作つて、その國で他の悪い國を叩きつけるといふやうなことは、到底實行は出來ない、そこで今のやうに、手緩いといへば手緩いことでありますが、各國の信賴と自制とを本として、お互に國際聯盟に依つて問題を解決し、悪い事は互にしないといふやうな思想が本になつて居る。

ウイルソンその他國際聯盟の創設に與かつて居る有力なる政治家の意見などを聽いて見ますと、大國はお互に將來喧嘩をしないやうにしなければならぬ、大國が喧嘩したら國際聯盟といふものは潰れてしまふ、今度東歐羅巴の方に澤山小さい國が出來た、彼の國は今まで獨立が出來ずに居つたのであるから、あゝいふものをその儘拋つて置けば、必ず戰が起つて世界の大亂を惹き起すのである、さういふものを抑へるには國際聯盟といふやうなものを作つて、强い國でそれを抑へ行くといふのが一番必要である。强い國と强い國の間に喧嘩したら、國際聯盟の本はすつかり壞れてしまふ、さういふやうな考で國際聯盟は出來て居るので、之を將來發達せしめて有效なものにするかどうかと云ことは、今後に於ける各國人民の覺悟如何に依ることであらうと見られるのであります。今日亞米利加では國際聯盟が氣に食はぬといつて、大分反對して居る、これは內情はウイルソンを攻擊する爲めに、內政上の理由から今の政府反對黨がやつて居るといふことでありますが、兎に角今亞米利加が國際聯盟、講和條約を批准するかどうかといふことは先づ問題である、國際聯盟はその名は非常に立派なものであり、目的は又極く結構なものでありますが、生れぬ先きから既に餘程苦情が附いて居るのであります。

（未完）

佛教信仰の正統（其二）

本多日生

三、力ある信仰

第二には佛教は力ある信仰を宣傳するものである。力ある信仰といふのは人間の活動を導く所の原動力となるを云ふのである。人間が善い事をする力を產み出すものが佛教の信仰であるといふ力は、多くは悪であり、罪である、醒めたる前に申した如くに、人生に醉つて居る上から出した力は、總て力といへば、佛教は力ある信仰を宣傳するものである。釋迦如來の教ゆる所は、人々を最も力强き生活に導いて來て、即ち力波羅密といふことを說いた。釋迦如來位、力を尊重して居る者は無い、自らは「佛力は無限である」と言ひ、「如來秘密神通之力」、或は「如來の神力」と言つて、卓越したる力を持つて居る。或は「如來番迅の力」「如來の勇猛の力」といふやうに、總て力といへば現れたる力は總て善であり、德である。

ふことを說いた。決して佛教徒は力が拔けて今日のやうに成つて居るべきでない。釋迦如來は法華經譬喩品に於ても、「身手に力あり」と言つて、十方法界の衆生が、悉くこの手にブラ下つても決して重いとは言はぬ、一切衆生をして我がこの手に縋れよと言つた。けれども手を以て汝等を救ふ迄もない、汝等には敎を以て救ふことが出來るから、自ら手を下さなくても我が敎を通して、汝等を救濟しやうと云ふことを、譬喩品に說いて居る。實に愉快なる文句である、「身手有力」——俺の手には力があるぞと言はれた。

で佛敎の信徒となる者は、この力を發揮することが目的である。女でも年寄でも佛敎を信じて居れば、普通の者より確かりした人格が出來て、自ら任じてやるといふ元氣が現れて來るのが佛敎の信仰である。或る場合には「總ての物を捨てろ」と云ふやうな敎訓があるけれども、それは詰らぬ物を持つて居ると善い仕事が出來ないから「先づそれを捨てよ」と云ふのである價値無き物を握つて居る。例へば破れた笠とか古い靴とかいふやうな物を風呂敷に包んで、左右の手に一パイ提げて居る、脊中にも豆の粕であるとか詰らない物を一パイ脊負つて居る、さうして「重たい〳〵」と言つて居る。そんな事はいかぬから、それを捨てろと云ふ、捨てろと云ふ事は、その明いた手を以て意義ある事を大いに爲さしめんが爲めに、さう云ふ無意義なる事を捨てろと說かれたのである。その「捨てろ」といふ言葉だけを聽いて、之を消極的である、厭世的であるなどと云ふのは、實に見方が粗末なんである、その通り何處にも說いてあるのである。釋迦如來は「先づ重擔を捨てよ」と說いた。重擔といふのは重い荷物であつて、即ち醒めざる生活の慾望の爲めに嫌やが上にも名利を貪り、劣等なる慾望に趨るが故に、それが身體に重荷を負うた如くに現はれて來るのである、劣等なる慾望が非常に重い爲めに疲れ果てゝしまつて何にもする事が出來なくなつて、非常な忙しい人生が現はれて來る。その「忙がしい〳〵」と云ふのは、何の爲めにあの通り電車にブラ下つて一パイ人が行き居るかと言へば、要するに金を得んが爲めである、活動寫眞を見んが爲めである、牡丹餅を食はんが爲めである。之を分類して見れば何でもない、洵に簡單な目的である。洵に貧弱な目的に依つて彼等は雜然として動いて居るのである。あの淺草行、上野行の電車に乘つて行く連中を捕まへて、彼等の用件を聞いて御覽なさい、玆に關所を設けて「汝は何の用件で行き居るか」と言つたならば、私は淺草に行つて活動寫眞を見て、歸りに蕎麥を食はうと思ひます」、「私は上野に行つて花を見て、歸りに牛肉屋に上がらうと思ひます」と云ふに過ぎない、洵に簡單なことである。所が釋迦牟尼佛は、左樣にして重擔を捨てた手を以て飽く迄も人を救へ、成らう事ならば一人の手を以て無限の衆生を濟度せよ」と言つた、共に協力して大勢に依つて大勢を救はうとか、一人で十人救はうといふのではない、限り無く幾億萬とも分らん無限の衆生を誓つて濟度せよと云ふ、力ある活動に附けよと敎へた。これは誰も知つて居ることで、佛敎徒は四つの誓願を立てるので、「衆生無邊誓願度」といふことは、口癖のやうに言つて居る。衆生は無邊と言つて邊なく澤山居るけれども、それを誓つて我れ一人で濟度しやうといふのが佛敎徒の發願である。それから見たならば、日本の佛敎徒は如何に力無き者であるかといふことが分る。こんなに大勢居つて法華宗だけでも坊さんが七千人居る、信者は何百萬と居る。何百萬も集まつて居つて活動する元氣が無いナンと云ふことは、實にをかしな話である。能施太子が蜆の貝を以て大海を干すべく元氣を出したやうな意味に於て決心すれば、其處に必ず力は現はれて來るのである。

故に日蓮聖人の信仰を見れば、「師子王の如き心を持てる者佛に成るべし」と說かれた。師子は如何なる敵にも怖れを懷かない、何がやつて來ても恐怖の精神を持たない、彼は寢て居つても恐怖の精神を持たぬ、他の動物は眠つて居つても「ドン」と音をさせればビク〳〵ツとする虎でも狼でも必ずさうであるけれども獅子は、「ドン」と音をさせても些つとも驚かない。眠つて居つても彼は安心の狀態に居る、それが佛敎徒の精神の力の象徵であるといふことを釋

迦如來は盛んに說いて居る。それを日蓮聖人が受けて「獅子王の如き心を持てよ」と言つたのである。故に如何なる大事が起つた場合でも、日蓮聖人は平然としてこれに答へて居る。これは大いに吾々の學ぶべき點である。日蓮主義者は剛健なる力を養ふと言つても、唯だ鼻張りばかり强くては何にもならん、今の日蓮主義者の大部分は、聲ばかり大きく、鼻張りばかり强いけれども、膽力といふものがあるや否や問題である。もつと大膽に、もつと本格に打込んで行かなければ、佛敎徒といふことは言へまいと思ふ。

日蓮聖人御自身の爲さつた事を見ると、非常な敵が現はれたけれども、何時も怖れを懷き給ふことはなく、笑つて大事に當つてお出でになる。どの場合に日蓮聖人が吃驚された、どう云ふ場合に日蓮聖人が弱つて神經衰弱を起したと云ふことはない、如何なる場合と雖も平然として居られる、その力は實に吾々の模範である他の宗旨にも澤山善い事があるけれども、さうハツキリして居らぬ、大事の場合に臨んでも、「マア〳〵どうでも宜いぢやないか」といふやうな引込み思案の事を言つて居るが、日蓮聖人はさうではない。國家の一大事に於ても、日蓮は日本の柱である、大元蒙古の襲來に就ても日蓮が引受けて、必ず日本の國を助けると迄、日蓮は自ら任じて居る。如何にその力が强く現はれて居るか、「日蓮ある以上は心配はありません」と云ふに至つては、冗談でも宜しい「私が居るから心配なさるな、日本の國は引受けました」と言はれるだけに、力强く現はれて來ればた」と言はれるだけに、力强く現はれて來ればこそ其處が佛敎信仰の正統敎義であると思ふ。

釋迦牟尼は、敵が十萬あると云ふ場合に、味方は一人である、これは迚も戰うても仕方がない、十萬あつても宜しいと言つて、段々近寄ると敵が優勢でいと云ふので、敵の優勢を見て腰を拔かす者は突擊を試みて行つて、段々近寄ると敵が優勢で我が弟子でない、十萬あつても宜しいと言つて思ひかへして、迚も行くあるから、途中にして思ひかへして、迚も行くまいと云ふので腰を折つた奴は無論我が弟子でない、十萬の敵に突入して遂に斬殺されて、敵陣に斃れた者も我が弟子でない、その十萬の敵軍を滅ぼして凱歌を奏する者にして、初めて我が弟子たる事を認めると言はれて居る。實に釋尊の弟子を策勵すること至れり盡せりである。何故に日本の佛敎徒は今日の如く力無き者になつたか、これは佛敎の學び損ひである、これは支那を經て來る間に、支那人の思想が加はつて變テコなものになつたので、釋迦牟尼世尊の御敎は決して左樣な薄弱なるものでないのであるから日蓮聖人が、國の爲め道の爲めに奮闘されたあの勇氣充實して居る有樣、あれが佛敎信仰の正統を現はして居るもので、氣拔けのやうなボク〳〵とやつて居るやうなものは、佛敎信仰の正統で無いのである。これを葬らんければいかん、佛敎の信仰が秣香臭いとか、緣起が惡いとか、力が無いとか云ふやうに見えたといふことは、佛敎の解釋に於ける大誤解である。初めから左樣に人生を觀た時には

ふことは、佛敎が受けて居る寃罪であるから、之を洗ひ落して、日蓮の如き信仰が佛敎の正統なることを天下に知らさんければならぬ。

四、德を生む信仰

第三には德を生む信仰が佛敎信仰の正統である。德を生まざる信仰は、信心と道德との關係が切れてしまつて、或は迷信になつて、信心はするけれども一向道德の觀念を持たない、或は道德より超越したと言つて、信心が道德の力とならなくなつて居る者がある。それは或る宗旨が、人生の道德などはどうでも宜いと言つて超越的なる思想を鼓吹した、或は人間を劣等視して、德は到底積めないものであると言つて、下根下機といふことを極端に用ゐて、人生を蔑視して道德を無視したる宗派を開いた。この人間を餘りに劣等に見て「德は積めない」と斷定したのは、實に人類を侮辱したるものである。釋尊も初めはさう云ふやうに考へられたこともあつたけれども、泥の中にも蓮が咲くのである人生は表面から見れば見捨てなければならぬやうに思ふけれども、その人の心の中の光を啓發する時には、泥の中に蓮が開くが如きものであると云ふので、妙法蓮華經を說かれて居る。然るに人生を徹底的に穢れたる者として、到底碌なる事は出來ないと、最後の最後まで人生を見經たるといふことは、佛敎の敎義の解釋に於ける大誤解である。初めから左樣に人生を觀た時には

蘇へるべき人間も蘇らなくなるではないか。徹底詰らぬものぢやと宣告を與へて、墮落せる人生に止を指されたならば、「大きにさうだ」と云ふことになつてしまふ。腐れさうでもその中に腐らぬものがあると言はれて氣が附いて、始めて人間復活の曙光があるのではないか。であるから釋迦如來の教へられたる信仰は、一面には如何なる者にも德を積むべき性質がある。即ち「原本易度」と釋尊はお說きになつて、本は大體教化のし易きものである。人間は善くなる向上性を持つて居る、それが社會の組織が惡いとか、家庭が惡いとか、色々の事情が惡いから芽を吹かんやうになつて居る。必ずや人間の心の中には上に向つて立派に成らうといふ向上性があり、非常な猛烈な力を以つて起つて居る。故に試に子供の時に尋ねて御覽なさい「お前は、えらく成るか成らぬか」「えらく成る」と云ふ、簡單明瞭なものである。「何に成るか」「大將に成る」。坊主の子供であるなれば「お前何に成るか」「管長に成る」といふやうに、一番最高の者を直ちに指して答へる、それ程人間といふ者は「えらく成る」といふことを豫期して居る。それが色々の事で彼方で鼻を突き、此方で頭を突きして、迚も碌な者には成れまいと昆古垂れるのである。けれども本來の性能は向上性を有するのである、其處が大事である。であるから敎を與へて個人の人格を修養せしめ、社會の狀態を改善して、德の行はれ易きやうに盡さんければならぬ。今日のやうに社會改良と言つてもパンばかり本位にしてはいかん。社會を改良するには、今のやうな淸き道德なり宗敎なりの生活を無視し、何も彼もパンにのみ熱中するといふ傾向を改良することが、社會改良の根本問題である。今日の如き誤れる傾向に於て改良を論じた所が、落つく所は碌なものではない、行くべき根本の道が間違つて居る。横道に這入つて其處でどうしやう、斯うしやうと言つて居る、その方向が既に謬つて居るものである、人生を導く所の根本着想が謬つて居るのであるから、到底駄目である。神戸に行かなければならぬのに、上野から仙臺の方に、向つて汽車が出だしてから、どう云ふ工夫を凝して見た所が、考へて居る間に段々北の方に行き居るやうなものである。

「どうもならぬ」と言ひながら皆なパンの問題に熱中して居る。西洋の如く百三十年も勞働問題を揑ね廻はしながら、とう〳〵ガタンと行つてしまつた、その跡を行き居るのであるから、又やはり「どうもならん」と言ひ居る中に、或る處か何かにドカンと打つかつてしまふ。先づ汽車を止めて、この方向がいけない、之を轉じなければならぬ、神戸に行くとするならば、無駄なやうだが以前通り上野に戻つて、山城屋にでも泊つて、日を改めて東京驛から乘換へなければならぬと云ふことが大事な問題である。乘りかけたのだから仕方がないと言つて、方向を謬つた儘でガチヤ〳〵やつて居るから、今の文明はどうしても改まらんのである。それを根本より警告を與へるものは即ち佛敎の信仰である。

佛敎の信仰は、人々の根本の德性を啓發して來るのであつて、丁度儒敎で見たならば、「人の德は眞心を開く事から起る」と說いて居るが、その眞心を開くといふことが信仰である。釋迦如來が何故に信仰を說いたかと言へば、「信は功德の母なり」と華嚴經に說いてある通り、何故に釋迦が信心を一番大事だと云ふかと言へば、これに依つて一切の德が生れて來る、德の母であるが故に、信仰を第一に說くのである。佛敎の信仰を幾ら說いても少しも德が現れて來ぬと云ふやうなことであるならば、信仰は値打の無いものである。信心はするけれども優しい精神が起らん、親に孝行もしない、世の爲めにも盡さぬ、我慾の爲めに一生懸命金を儲けることばかり考へて居るといふならば、それは信仰では無い、一種の迷へる者である、唯だ宗敎の形式を借りて迷ひを增長さして居るだけのものである。宗敎に來る以上は、信仰を通して道德の生活が其處に開かれて來なければならぬ。

それ故に日蓮聖人の敎は、御承知の通り樣々なる道德の性格を導いて、聖人自身がすでに非常に親孝行でもあり、又國を思ふ人でもあり、親切なる人でもあり、弟子を愛するに就ては『土牢御書』があり、信者に對しては『同地獄鈔』があり、或は『波木井御書』があり、如何にも親切なる美しい德がある。一面には剛健なる德性を開いて居るけれども、「鳥と蟲とは啼けども涙落ちず、日蓮は泣かねども涙ひまなし」と云ふやうな、非常な溫かい德性を開いて居る。それで母が亡くなられた時にも、蘇へることを一生懸命に祈られて、母が蘇生をされた、これは即ち人間の至情である。親鸞上人の言ひ草のやうに、「母の爲めには一遍も念佛申さず候」、自分の事さへどうも安心が付かんのに、お母さんの事までは手が及びませぬ、自分が食うや食はずに居るのに、迚も親に饅頭など買うて歸れませぬと云ふやうなことを言ふのは、甚だいかんと思ふ、佛敎といふものはさう云ふものではない、飽く迄も信仰をする以上に於ては、親の爲めには孝行、夫婦の仲は睦まじく、國には忠節といふ風に、この信仰を通してあらゆる德性が鞭撻刺戟されるといふことが無くてはならん。日蓮聖人の信心はその通り、あらゆる方面に現はれて居る、家庭の上から言へば親孝行である、個人の人格としても親切であり、友誼であり、國家に對して言へば忠君愛國であり、社會的に言へば廣大なる慈悲心を以て佛敎を弘めて居る。又佛樣に對しては熱烈なる信念を持つて居る。即ち宇宙的にも、人類的にも、國家的にも、社會的にも、家庭的にも、個人的にも、あらゆる方面の德性が煥發したものが日蓮聖人の信仰である。

釋尊の一切經を觀ても亦その通りである。釋尊の敎の中には、非常に大きな全宇宙を救ふやうな大道德があるし、國を愛する所の護國の觀念も說いてあるし、觀孝行すべきことも、四恩の中に、「第一親の恩」と言つて說くし、又そればかりではない、始めの阿含の時にも說いてあるが、恩を感ずるといふ觀念に於ては、非常に強く現はれて居る。

左樣にして佛敎と云ふものは、實にあらゆる方面の道德を啓發するものである。佛敎を信心するから人間が優しくなつて來るとか、或は今申す通り正しき觀念に於て元氣附いて來るとか云ふ人格の改善といふことは佛敎に於てはあらゆる方面にある。どんな惡人でも佛敎に依つて感化されない者は無い、阿闍世王であらうが、鬼摩羅であらうが、女で言へば人の子を奪つて食ふ鬼子母神であらうが、又釋の分らぬ愚癡婆あであらうが、皆な感化されて、その性質たる所の不德惡といふものを淨めて、道德的に感化されて居る。唯だ今日のやうに信心すると言ひながら、以前の性惡る婆あが性惡る婆あの儘で、唯だ珠數を持つて唱へ言葉だけ覺えて南無妙法蓮華經といふだけで、性の惡い性質がその儘だと云ふやうな微溫いことは佛敎にはない。釋尊の言葉を聽いてその感化に觸れれば、先づ第一己れの性質を捨てゝ淸められたる信仰に移つて居ると云ふことは、あらゆる點に於て明晰なることである。然らば佛敎の信仰は德を生むの信仰であつて、德を生まざる信仰、德と離れた信仰といふものは、釋尊は之を敎へたものでないと云ふことが言へるのである。

それで五戒の事なども始終說いてありますが殺生をしてならぬとか、偷みをしてならぬとか云ふことの解釋でも、餘程よく說いてある。殺生といふことは人間の優しい精神を橫切るもので、物の命を奪るといふことは、殘忍なる性質である。「その聲を聽いてはその肉を食ふに忍びず」といふ事がある、鷄なら鷄を締めてギヤー〳〵言つて啼いて居る聲を聞いて、「今彼所で締めたあの鳥だ」と思ふと、食膳に上つても食ふ氣がしないといふのが人間の優しい精神である。其處で佛敎は始めからさう云ふやうな殘忍な事をしてはいかぬと言ふのである。今日は全體人間が殘忍になつて來た、直に石を打つけるとか、ちよつとした事でもナイフで人の頬べたを斬るといふやうな事をして喜んで居る。それも國家の大事であるとか、非常に重大な事なら宜いけれども、一寸人が氣に入らぬ事を言つたとか云ふやうなことで喧嘩をする、どうも近頃人間が荒つぽくなつて居る。釋迦如來の敎は人間に柔らいたる精神を與へ、所謂「一狼と一梟と蛇と一つの穴に棲んで相親むこと兄弟の如くならば、我れ安んじて涅槃に入らん」と言つたが如くに、利害の衝突があつてもその衝突を緩和して、人生に圓滿なる平和を實現せなければならぬものである。それが佛敎信仰の本性であつて、佛敎の信心が盛んになる所には、必ずや掠奪爭鬪と

いふことは除かれて行くのである。

東洋の天地が四千年の歴史を經て、餘り激しい侵略の無かつたといふことも、佛教の感化が大なるものであつたのである。今迄は溫和し過ぎていかぬと云ふことで、佛教を攻擊して居るけれども、佛教は單に溫和しいのではない。先に言ふ通り力ある信仰を與へるけれども、德の上に於ては正義を守るが故に、西洋の國のやうに侵略と云ふことを見ない。東洋の國々の間に於ても、支那と日本の關係でも、又印度との關係でも、この長い歴史に於て、相互の間に激しい掠奪といふものは、曾て行はれて居らぬ。又亞細亞から他の國に對して激しい掠奪をした事も無い、僅かに蒙古の事があるけれども、これは特例であつて、唯だ一人さう云ふ鐵血的豪傑が起つてやつた仕事である。けれども東洋全體の國家文明と云ふものから見たならば、決して今日世界でワイ〳〵言うて居るやうな修羅の如くなるものでない。寧ろ今迄は壓迫を受けて來たものであるから、今後はこの佛教の教に依つて正しき力を養ふべきである。さうして平和なる文明を造るといふことに就ては、基督教が平和の教であるか、佛教が平和の教であるか、宗教としては何れも平和を理想するのは當然であるけれども、併ながら基督教の歴史には非常に激しい血腥い歴史が伴うて居るやうに聞いて居る。佛教の歴史には曾て左樣なことがないと云ふ點に於て、事實上の證明から佛教といふものが眞に人生を平和にするものであるといふことが言へると思ふ。（次續）

△鞭橫立正會　一月二十五日午後五時より豐橋市妙圓寺に於て新年第一回を開催す、當日の來會者は吉橋加藤兩少將を始め知名の士二十六名、定刻に至るや細谷市長幹事を代表して開會を宣し、次で吉橋ル將は一國際聯盟と國民の覺悟」と題し、聯盟の實際的價値を批判し、國民覺悟の第一は立正安國にある旨を論じ、右終つて新年宴會に移り、席上思想、勞働其他諸問題に付き會員の意見交換あり、酒宴半ばにして大竹直治氏の所感及び琵琶歌大喝采を博し、歡興を盡し、九時解散せり、因に新年勝頭の入會者は福田愛知銀行支店長外五名なりと、

△福井通信　福井市妙經寺に於ては客臘十一月廿五日北陸巡教中の野口僧正を請じて、常樂院日經上人の三百年忌法要を嚴修したり、即ち當日午前十一時より法要、午後三時より說教、午後七時より大講演を開催す來會者三百餘名、日經上人當時の法難と奮鬪を追憶して感極りて泣く者ありたりと、

△武田顯龍師夫人逝去　文學士武田顯龍師夫人絹江子は懷妊中の處一月中旬惡性感冒に侵され廿六日次女紀子を分娩し廿八日午前四時夫君を始め親戚知己に圍繞せられ誦經唱題裡に安然として長逝せられたり廿日午後二時本山部長萩原日道師大導師の下に葬儀は嚴修せられ列式するもの大津日文師木下圓通師森川泰洲師有田宏道師小出顯正師あり又此の日會葬せる者は三鳥町各宗寺院十五名三鳥町在日蓮宗寺院三名及び田方郡長加藤節次氏を始め遠きは二里三里遠隔の地より集まれる檀信徒及び地方有志等無慮四百名にして遠地より弔電を寄するもの六十餘通弔辭香賚等を寄するもの數百通にして近來稀に見るの盛儀なりき。

佛の愛

江藤義成

（一）佛の慈悲は
　苦海の衆生を
　共に仰がむ
　み親となりて
　救はせ給ふ
　愛の御顏を

（二）佛の智慧は
　無明の闇を
　共に仰がむ
　光りとなりて
　照させ給ふ
　愛の御顏を

（三）佛の功德は
　種々の穢れを
　共に仰がむ
　蔵りとなりて
　除かせ給ふ
　愛の御顏を

（四）佛の力は
　煩惱のきづなを
　共に仰がむ
　劍となりて
　斷たせ給ふ
　愛の御顏を

南無妙法蓮華經

聖典

世俗諦と勝義諦

本多日生

波斯匿王佛ニ白シテ言サク、世尊ヨ、勝義諦ノ中ニ世俗諦アリヤ不ヤト、世尊即チ偈ヲ說テ言ク

二諦ハ常ニ即セズ
解心ニ無二ヲ見ル
二ヲ求ムルニ得ベカラズ
二諦一ナリト謂フニ非ズ
一モ亦得ベカラズ
解ニ於テハ常ニ自ラ一ナリ
諦ニ於テハ常ニ自ラ二ナリ
此ノ一二ヲ了達シテ
眞ニ勝義諦ニ入ル

（仁王經二諦品第四、正大藏第十五套ノ九）

この品は世俗諦と勝義諦、卽ち世間と佛法との關係に就て微妙なる教調を垂れられたのである。天晴地明の日蓮主義の思想も矢張りこの意義である。佛教には世間と佛教との關係を說くことは屢々現はれるのであるが、その意義に於ては何れも同じであるけれども、その關係を解釋するに就て最も完備して居るものを會得すれば、他の經文は解釋を須ゐずして領解することが出來る。この文は最も能く整ふて居ると思ふから、之に依つて十分領解し得らるゝと思ふ。

波斯匿王が佛に申すには、世尊よ勝義諦卽ち佛法の勝れたる義理と云ふか、出世間と云ふか、その一番良い所の佛法の、第一義と云ふか、その一義と云ふのは、矢張り世間で云ふ德教の意味があるかどうかとお尋ねした。「諦」と云ふのはアキラメと云ふことであるが、明かに物を觀ると云ふ事である。故に「勝義諦」と云ふのは洵に明白なる而して意義の深い教である。「世俗諦」と云ふのは、世間一般の通俗的の教である、卽ち政治とか、經濟とか、殖產興業と云つて居るのが世俗諦である。世俗諦は淺いけれどもそれを偉いやうに思つて居るのは、目前の利害から判斷して居るのである、勝義諦の方は永遠から判斷し、本體から判斷して居るのである、世俗諦に居るものは、佛法は要らぬと云ふやうな事を云ふのは佛法を知らぬからである。その世俗諦の向上し進化したものが勝義諦である、故にその關係は全然別なものでない。それで世尊のお說きになる勝義諦の中に世俗諦がありますか、ありませぬかと聞いた時に、世尊は偈を以て答へられたのであります。偈を以て答へられたと云ふのは、斯の如き事は明白である、併し之を忘れないやうに、受持して行かなければならぬ、何遍も聞いて、分つたやうな、分らないやうな、グラ〳〵して居つてはいけない、能く解領して居らなければならぬ、それで偈を以て說かれると云ふことになつたのであります。「二諦は常に卽せず」この佛法と世間はいつでもそれが同じものと云ふ譯けにはいかぬ「卽」はこの場合に於ては二ならず差別せずと云ふ事であるから同じと云ふことであります。二つのものは決してその儘同じとは云へない。「解心に無二を見る」とは之れを領解したる心に依つてその關係が融合されて來るのである。この解心に無二を見ると云ふ事は、是は永遠の眞理である今でも眞に領解を持たない佛教徒は佛教と世間とが別であ

ると思ふて居る。無論政治家などが佛教の事を領解しない限りは、政治と佛教とは永遠に別である。その解心と云ふものはそれだけの思想が向上して、政治の本義と佛教の本義との疏通點が玆にあることを領解しなければならぬ。今度内務大臣が解心を以て思想界の事に心配せらるるのは結構な事であり、そこに疏通點を能く發見するのである。さればとて政治が直に宗教であると云ふのではないが兩方が本領を護つて理解ある政治家、理解ある宗教家に依つてそこに疏通が得られるのである。そんなら二つに分けてしまつて、政治は政治、宗教は宗教と、全然別個のものかと云ふと決してさうでない。「二を求むるに得べからず」政治と宗教とを今日の文明が考へるやうに、二つにして考へることは當を得ない、政治の中にも宗教の意義があり宗教の中にも政治の意義があるから、政治は有形を支配し宗教は無形を支配すると云ふやうに、全然白と黑と云ふ風に區分し得るものではない。さればとて、政治萬能で、日本の過去五十年のやうに、宗教を無視して政治の中に宗教が入つて居るかと云ふと、入つては居らない。又西洋の基督教のやうに、宗教の中に政治を入れ一しまつて宗教萬能と云ふものかと云ふとそれはいかぬ、二諦は矢張二諦である。全然之を區別して別個のものとすることも出來ない、又「二諦一なりと謂ふに非らず」政治の本領は政治の本領として押へ、宗教の本領は宗教の本領として押へ、さうしてそこに兩方を疏通し得る所の領解がありて始めて政治を一致せしむることが出來る。所謂相互に相扶けて社會を向上せしむる所の圓滿なる、活動が得らるゝのである。故にこの二諦は客觀に置いて考へる時に二なるものであつて、政治と宗教とは別なものである。けれども主觀を加へて行く時には之れを能く疏通させて行かなければならぬ。故に吾々佛教徒は、政治と宗教とを單に一なりとして混同することを許さないと同時に又二なりとして永遠に分離して相反目して行くことはいけない。一と二との關係を能く了達して、解心を加へれば一つである。客觀に置いて考へる時には本領は互に違ふ、政治と宗教とは各々本領を異にするが、それが互に協力して社會の向上に貢献して行く、國民の教化を完ふして行く、そこに一二の微妙の干係を了達すべきである。その一二の干係を了達し得る、それが即勝義諦である。佛教は決して世俗と對立して教へるものではない、非常に深遠なる精神的なる事柄と實際生活の上に働いて居る事柄とそれが俱に包括される。現在と未來を包括し、理想と現實を包括する「一二を了達して眞に勝義諦に入る」と云ふが即ち佛教である。それを西洋人は一なら一、二なら二と云ふことを云つて居るから、一二の微妙なる干係を了達すると云ふ事が出來ないのである。

◎京都通信△一月六日午後七時、妙滿寺方丈に於て護正會新年會開催、本年より毎月末多管長猊下御入洛の事になりたるを以て、天晴會自慶會の復活活動に關し協議す、△十三日午後一時國光婦人會新年會「婦人の自覺」萩原部長△十六日午後一時妙光婦人會「信仰の生活」金光師△十七日午後一時本正婦人會「戰後婦人の活動」金光師△十八日午後一時寂光婦人會「一の字に就て」金光師△廿日午後一時護正婦人會「春は强也」有田師△廿五日午後一時正行婦人會「大正婦人の自覺」萩原堀草師△廿八日午後二時國光婦人會「婦人の終幾」萩原部長△二月二日午後七時護正會「本宗宗義」萩原師△八日午後二時護正婦人「報恩抄講義」有田師△九日聖祖門弟同志會「眞の宗教」有田師、△十三日午後一時宗祖會「發願なしとて黃金を捨ること勿れ」金光師。

◎瀧野喜八郎氏逝去　總本山妙滿寺信徒總代瀧野喜八氏は昨夏七月より病氣療養中の處、遂に十二月廿一日安祥として逝去す、廿四日午後一時本山に於て葬儀執行、多年本山に對する功勞により管長猊下よりは慇懃なる弔電あり、又宗務廳よりは香賚を送られたりと。

◎芳志　雜誌「統一」發展費の内へ故滿井吉太郎氏追善として遺族滿井家一同より金貳拾圓也寄附せられたり

◎清明會の發展　理事長宮原六郎氏より金六十圓也基本金として寄附したるにより財團法人組織を申請中の處二月十八日附文部大臣より許可せられたり、同會は三月下旬より本多猊下の法華經講義服部博士の儒教及加藤玄智博士の神道講義を開催する由

教義　日蓮聖人教義綱要（第廿九回）

井村日咸

第八章　修行

第六節　正法の護持

佛法修行の要諦は正法の廣布宣傳にあることは前各節にお噺致したる通りであるが、若も佛陀の御教を信ずるものにして、正法の廣布に就て何等の思を致さゞるものあらば、それは決して佛陀の御教を信じて居るものと言ふことは出來ない、涅槃經に

能く正法を護持する因緣を以ての故に是金剛身を成就することを得たり

と說き、又、

我涅槃の後其方面に隨ひ持戒の比丘有つて威儀具足し正法を護持せば法を壞る者を見て、即ち能く駈遣し呵責し擯治せよ、當に知るべし、是人は佛を得んこと稱計すべからず

と說けるは正法護持の大功德を說けるものである、此に反して正法護持の志なきものは、佛法の怨敵なるを說いて

若善比丘、法を壞る者を見て、呵責し駈遣し擯處せずんば、當に知るべし、是人は佛法の中の怨なり

と御戒誡に相成つて居る、此經には更に幾多の實例を示して懇々の御諭があるのであるが、日蓮聖人は立正安國論開目抄等の中に正法護持の大義なるを說いて、末代法華經修行の要諦正しく護法の一念にあるを說示せられて居るのである。

立正安國論には謗法禁斷が正法護持の最大要件なるを說き、開目抄には護法願業を說いて護持の大義を示されたのであつて、此二面は一は積極的であり、一は消極的であり、一は邪的であり、一は破邪的である、この二面は一體の兩面であり一は破邪的である、この二面は一體の兩面で離るべからざる關係にあるのであるが故に一方に偏傾すべきでない、圖示すると左の樣になる。

謗法禁斷…破邪的…消極的（止惡）
護法願業…顯正的…積極的（作善）

積極的に正法の宣布に努力し、其主義を擴張すると同時に、其邪惡に陷るを防ぎ誤謬を匡すことをせんければならぬ

謗法禁斷に就はて立正安國論の中には委細に御示に相成つて居ることであるが、法華經諸品には十四誹謗罪を說いて、謗法の相狀を御說示に相成つた、此十四誹謗の罪は地獄に墮つるの原因であることを明された文である、十四誹謗とは

一、憍慢　二、懈怠　三、計我　四、淺識
五、著欲　六、不解　七、不信　八、瞋恚
九、疑惑　十、誹謗　十一、輕善　十二、憎善
十三、嫉善　十四、恨善

である、一般の考には、堂々と反對せねば誹謗罪にはならぬ樣に思はれて居るけれども、此經文に示された處に依ると、叶教に入つたものが一心に信仰に溺まねば、憍慢懈怠の罪となり、其教義の深義を了解せざるときは淺識の謗法となり、他の信仰を輕視するが如きは輕善の謗法と爲るのである、積極的の反對でなくとも、消極的に此教の廣宣流布を希望せざる樣の態度のものも誹謗罪を構成する、世間の罪は事實に犯さねば罪にならぬが、佛法の罪惡は身口の兩業ばかりでなく、意業即ち精神的に犯した罪にも相當の制裁を受くるのであるから、餘程注意をせぬと不知不識の間に謗法の大罪を犯して居る樣な事がある、著欲と云ふ如き、今日大多數の信仰者と自任して居る人々が此罪を犯して居るのではあるまいか、折角信仰をして居りながら誹謗

罪を造る樣なことであつてはお氣の毒に思ふのであります、或は憍慢に墮し、或は懈怠に流れ或は淺識、輕善、憎善、嫉善等の罪を犯すものは勘からぬ樣に思はるゝのであります、秋元鈔には器に覆、漏、汙、雜の四失あるを擧げて、我等が信仰の四失に例し、此四失を離るゝを完全なる信仰なりと御示に相成つて居る、此四失は即ち謗法罪である。

我等が心は器の如し、法華經と申す佛の智慧の法水を我等が心に入れぬれば、或は打返し或は耳に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ、或は口に唱へじと吐き出しぬ、譬へば器を覆するが如し、或は少し信ずる樣なれども又惡縁に値ふて信心薄くなり、或は打捨て、或は信ずる日はあれども捨つる月もあり、是は水の漏るが如し或は法華經を行ずる人の一口は南無妙法蓮華經、一口は南無阿彌陀佛なんど申すは飯に糞を雜へ沙石を入れたるが如し、（中略）是は雜也、此覆漏汙雜の四の失を離れて候器を完器と申して全き器也、塹つゝみ漏らざれば水失する事なし、信心の心全ければ平等大慧の智水乾く事なし（縮遺一九二九）

信仰の曖昧なるもの、熱烈ならざるもの、間斷的なるもの雜信的なるもの、如きは此四失の中に數へらるゝものであつて、此四失が即ち謗罪を構成するの要素となるが故に此四失を離れねば完全なる信仰とは云はれぬのである、此は譬喩品の十四誹謗罪を器の四失に寄せて通俗的に說明せられた御文である、更に同鈔には謗法に就て謗身、謗家、謗國の三義あるを明され、謗身とは我身の謗法罪である、謗家とは家庭の謗法、謗國とは國家の謗法罪である、謗家の家に生れ、謗法の國に生るれば、謗家謗國の罪を得ると言ふのである、此三の謗法罪を免れんとするには、謗身の罪を免るゝには自己の信仰を正うして誤らざる樣せねばならぬ、謗家には父母兄弟等に此信仰を語り聞かせて信ぜしめねば其罪を免るゝ事は出來ぬ、謗國には國主を諫め奉りて信仰をお勸め致さねば其罪を免るゝ事は出來ぬ、日蓮聖人の國家諫曉は德教の建設國恩報謝の爲めではあるけれども、一面には謗國の罪を免れんが爲めに爲されたことゝ云ふことが出來るのである、正しき信仰を維持するには常に我身の邪路に踏入らざる樣、人の邪路に踏入れるものは此を正路に返らしむる樣心掛て行かねばならぬ、此が謗法禁斷の一面である。

次に積極的顯正的方法としては正法の宣傳に從事することである、此を護法顯業と云ふ、所謂正法の宣傳に際しては不惜身命の心地に住し、所有迫害と戰ひ、誘惑を却けて勇往邁進すべきである、日蓮聖人開目抄に示して曰く

詮ずるところは天もすて給へ、諸難にもあへ身命を期とせん、善につけ惡につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし、大願を立ん、日本國の位をゆづらん、法華經をすて、觀經等について後生を期せよ、父母の頸を刎ん、念佛申さずばなんどの種々の大難出來すとも智者に我義やぶられずば用ねじとなり、其外の大難風の前の塵なるべし、我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん等とちかひし願やぶるべからず（縮遺八一六）

と、此文に所謂大願とは護法顯業である、威を以つて誘惑を以つても之を破るべからざる大決意を以つて、此正法の宣傳に從事し、以て一切衆生の盲目を開き、一切苦惱の衆生を濟度せんとの大願を立つるを以て、此大誓願を果すには如何樣な實行方法を取らねばならぬか、何う云ふ風に此經の宣布を計らねばならぬか、此には前節に申上げた五つの方面より觀察して最善の方法を試みねばならぬが、佛は護法に內護外護の二あるを說かれた、內護とは法施と云ふて、講演若くは文書等を以つて直接此教の宣傳に從事するものを云ふのである、外護とは身施財施の二である、身施とは手足を以て供給するもので即ち勞力を以て此教の宣傳を補助するもの、財施とは布教興學の資源を供給するもので、財力を以つて宣傳の援助を爲すものである、此二は間接に宣傳の後援を爲すものなるが故に外護と云ふたのであるが、此は一往の分類である、結局は護持正法の爲めにする三施は共に同等のものと言はねばならぬ、斯く三種に分類して居るのは隨力弘通の意を徹底せしめんが爲めであつて、人各其能あれば、其能力に應じて此教の爲めに盡すべき樣教へられたのである、財力あるものは財施に依りて此教の廣宣流布を計り文筆あるものは文筆に依り、勞力に任ずるものは勞力に依り、口演に巧なるものは言說に依りて各々其特長を發揮して正法の宣傳に努めなければならぬ、技藝に秀でたるものが、其藝術に依りて正義の宣傳に盡すが如き、若くは宣傳の後援爲すが如き何れも護持正法の適切なる方法であります。

論叢

勞働問題根本解決策

（一名産業利益分配論）

永井米藏

目次

主義 二七
第一章 總論 二七
第二章 產業成立の要素 二八
第三章 國際勞働會議に於ける五箇條の議案
第四章 產業成立の要素と其の利益の關係
第五章 勞働代表者選定協議會の實態其他

主義

一、產業は資本、勞働の二者のみにて成立するものに非ず

一、產業は資本 經營者 勞働者 國家 社會 自然の六要素より成立す

一、資本に對する或程度の利息は產業の利益に非ず

一、產業利益は產業成立の要素によりて分配すべきものなり

口書

余は織物技師なり終日工場內に在て原料製品を調査し機械を取扱ひ經濟的に織物を製造する職分を盡し居るものなるが余自ら之を以て天職と心得居れり然るに近時歐米に於る勞働問題は勞働、資本の反目軋轢益々甚しく或は世界の秩序を破壞し文明の基礎を覆さざれば止まざるが如き氣勢を示し其潮流は我國へも波及し所謂勞働問題は日々高潮を呈し或は惡化せんとする兆候なきに非ず余は技術者なり斯る社會問題に容喙することとは余の本分に非ずと雖も自ら勞働の渦中に投じ日夜勞働者に接し考慮或は研究する事玆に二十八年駑鈍ながら幾許か自ら信ずる所あり又先般農商務省に開催せる國際勞働會議出席勞働代表委員選定協議會に臨み協議員の言語動作并に其心理狀態等に察し勞働問題の實に容易ならざるものあることを覺れり依て自ら社會の一員として我不敏を悟らず不顧の筆を執り信ずる所の概要を記述し先覺諸彥の高敎を乞はんと欲す若し夫れ多少なりとも問題解決の爲めに稗益することを得ば余の滿足幸福之に過ぐるなし

第一章 總論

最近英國に於ける鐵道從業員の同盟罷業及び同國の鑛業國有問題並にトレードユニオンの三角同盟等は何時如何なる變動を起すやも計り難く如何にも不安の狀態に在るが如し又米國の鋼鐵同盟罷業の如きも其性質漸次惡化し他のユニオンに於ても之に共鳴する者あるが如く且有名なる勞働總同盟會長ゴンパース氏は上院に於て同盟罷業の止むを得ざるに出でたる事を宣言し或は罷業者に對し仲裁を行ふ等如何にも不安の狀態にあるが如し翻て我國の狀態を顧れば去九月十五日農商務省に於て第一回國際勞働會議に出席すべき勞働代表委員選定協議會を開會せる以來、協議員の資格問題、第一候補者本多博士の辭退、第二候補者高野博士承諾後の辭退、第三候補者桝本氏の就任、或る一部の反對運動等混

亂に混亂を重ね徒に世人をして五里霧中を彷徨するの感あらしめたり卽ち世界何れの部分も不安の疑念に滿たざるなきの狀態なり

抑も勞働問題の原因を尋ぬるに歐米各國に於ては古來個人主義、利己主義權利主義發達し溫情、義務、同情等人類生活の共存共益に必要なるべき要素を缺き理論、權利の思想のみが社會を支配したるの結果、法律、人情、習慣等自ら冷酷となり優勝劣敗を自然の原則と心得、弱肉强食は當然の結果なり眞理なりと誤斷するに至り其の結果は百數十年以前より弱者劣者は多數の團體則ちトレードユニオンの力に依りて强者に對抗し兩者永年の習慣は氷炭相容れず互に敵視し爭鬪しつゝありし折柄此度の世界大戰に依りて貧富强弱は一層甚だしきを加へ終に融和の協調點を發見すること能はず否一致點を發見し得ざるに非ざるも永年仇敵視したる感情は如何なる名案も一願の價値なしとなし其勢は急轉直下して今日の如き進退兩難の窮地に陷り而も弱者側は此上にも尙ほ猪進して永年加へられたる其壓迫に對し反撥を試みずんば腹の蟲が承知せぬと云ふ狀態となり其結果は殆んど豫想し得ざる混亂狀況を呈せり

顧て我國の狀態を顧れば勞働問題なる語は數年前より一部識者間に唱へられたれども元來我君民一致の國體と人種の統一は世界に超越し古來義あり勇あり溫情あり其思想は穩健にして歐米の如く冷酷ならず有名なるデモクラシー思想の如きも二千年以前より弘通し居れる有樣にして何にも行詰りたる歐米思想を輸入し又依倣する必要なく況や其惡しき跡を追ふの必要は毛頭無し然るに此度の世界大戰の結果は國民思想に變動を招來したるが殊に經濟上に於ては一層大變動を招來し通貨の如きは實に數倍の額に膨脹し國富又大膨脹をなし物價も亦二倍以上に暴騰したり而して此增大したる富は大抵資本家の掌中に集り資本家は座ながらにして巨富を積みたるの觀あるに反し勞働者は賃金多少昇給したりと雖も其割合は物價暴騰の比率に及ばざること遠く其の生活狀態と言へば向上所ではなく既往の窮地をすら脫するを得ず此千歲一遇の此國富大激增の秋に於て少しも富の分配を受くるの機會を得ざる有樣なり然るに人格の劣等なる成金者は夫れ自働車やれ妾宅と傍若無人の擧動を敢てし多數勞働者並に世人の反感を惹起せしこと は今日の所謂勞働問題を煽動したる一原因たるに相違なきなり去り乍ら現行權利主義の法律並に產業組織の現狀よりすれば斯くなるは如何にも當然の結果にして余を以て之れを見れば今日の產業組織は其根本に於て最も緊要なるべき利益分配制度に大缺點の存在することを示すものなり夫れ今日の組織は產業は資本、勞力の二者より成立し利益も從て此二者に分配すれば可なりとなし二者の利己の爭が則ち所謂勞働問題を形造るに至れり同盟罷工も怠業も觀じ來れば二者の利己的爭奪戰に外ならず則ち產業は勞資兩者の專有なりとの謬想より今日社會國家に害毒を流しつゝあり而も世人は之れを止むを得ずとして傍觀しゝつあり

元來產業より利益を生ずるは勞資の二者のみに所由するに非ず勿論二者は其必要要素たるには相違なきも元來產業の全要素は

資本　經營者　勞働者

國家　社會　自然

の六要素より成立するものなるは明なり此六者の結晶たる產業より利益を生じたりとすれば其要素の輕重に應じ之に對し其利益を分配すべきは當然の事と言はざる可からず然るに從來產業は資本勞力の二者より成立し從て其利益は其二者のみへ分配すれば可なりとする誤謬を基礎とする分配組織を金科玉條と信じ恁くて兩者の利害を相背反せしめ其間に自ら溝渠を作り而も習慣の久しき互に相仇敵視せしむるに至り所謂今日の勞働問題を惹起したる次第なり以下少しく六要素に付き說明を試むべし

第二章　產業成立の要素

前述の如く產業は一資本、二經營者、三勞力、四國家、五社會、六自然の六要素より成立す

一、資本

事業を經營するに資本を要するは贅言を要せず

二、經營者

事業を經營するには相當の材幹智能ある經營者を必要とし其手腕の如何に依り事業に盛衰あるは論を待たず我國に於ては經營者は多くは資本家なるが時には資本家ならざる敏腕家其任に當る事あり歐米に於ては經營者は資本家に比し寧ろ敏腕家にして資本、勞力の二者以外に特立せる者多きが如く又將來に於ては益々多きを致す傾向あるが如し卽ち經營者は事業經營の一大要素にして產業成立の基礎たること勿論なり

三、勞力

勞力の產業に必要なることは言ふを俟たず然れども勞力を最も有効に利用することは更に必要なる條件なり

太古田を耕して食ひ井を堀りて飲むの時代はいざ知らず日進月步の今日に於ては學理の應用と機械の發明とは吾人勞力の効果をして幾百倍幾千倍ならしめたり從て勞力は此等學理と機械とに順應せしむるの道を講じ双方相互に併行進步せしめざる可らず只勞力のみが神聖なり勞力のみが基礎なりとの誤りたる觀念に支配せらるゝ事あらんか其結果は勞力を空費し貴重なる勞力の効果を無効にすべきなり要は生產の効果如何に在れば玆に勞力を主として考量すとするも學理機械の應用に對しては最も銳敏なる注意を拂はざるべからず

四、國家

國家權力の下に社會の秩序が維持され又國民の福利が增進されつゝあることは言を俟たず而して國民の幸福增進を目的とする產業が國家保護の下に成立すべきは當然にして試に國家なくして產業成立する理由なきなり國家は產業の要素否寧ろ基礎たるを以て產業が個人の經營たると法人の經營たるとを問はず國家に對し義務を負ひ又國家の命ずる義務を果すべきは當然なり然り產業の種類に依り國家の保護を受くる程度に於て多少の輕重ありと雖も保護の經重は必ずしも其國家に負う義務の多少を律するものに非ざると同時に又其產業より生ずる効果の多少を律するものにも非ざるべし何となれば事業の効果の如きは其事業の性質と時運の如何とに依りて互に相異ればなり故に產業の立脚地より觀察するときは國家の保護に依る恩惠は國家の命令に依る義務を果したるのみを以て足れりとすべきに非ずして能ふ限り其國家の恩惠に對し充分の報恩を爲すことを期せざるべからず

五、社會

玆に社會と云ふは世間のあらゆる物を網羅したる意にして換言すれば社會を組織する凡百の事物卽ち、人類は勿論動物等現在必要的要素を纏めたる意なり社會なる用語の當否は暫く置き其趣旨は其產業を成立せしむるに必要なるべき總ての社會的要素を含みたるの意味と解すべし

特に該產業に要する原料の生產運搬、製品の分配消費に關係を有する一切の人類及び事物は產業と直接利害を共にし、社會的要素中に於ても一層密接の關係を有し到底產業と分離すべからざるものなり

人類が唯一人にて生存し能はざるが如く產業も亦單獨にて成立するものに非ず人類が共存共益を基礎として繁榮するものとせば產業も亦相互協力を根本として發達せざるべからず故に產業の成立に就ては社會に對して相當の義務を負はざるべからざるは當然の事なるべし

殊に產業を經營する地方一帶の社會に對しては相當なる敬意換言すれば相當なる義務を負擔するを以て正當なりと信ず例へば一の鑛業を經營するとせんか資本、鑛區、鑛具、勞力等は其直接要素なれども間接には鑛具製造者、輸送業者、及從業者生活必要品の供給者等は缺くべからざるものにして彼等なくんば鑛業は成立せざるなり此等各間接要素は其各自の經營則ち利害の結果如何に關せず鑛業成立の上より必要缺くべからざる者たり而して此等各間接要素たる各事業の成立も亦其軌を一にするものなれば必竟社會全般に關連する者にして鑛業者は社會に向て相當義務を負擔せざるべからざるなり

六、自然

玆に自然と言ふは前記述の國家、社會の何れにも屬せざる自然物例へば空氣、風、水、雨、草木、光線等人生又は產業に缺くべからざる物に

して而も國家社會若しくは個人より直接の制肘を受くることなく自由に之を使用し得る範圍のものを指示す其自然なる用語の當否は暫く置き此等は各自無報酬にて自由に之を使用し得べく使用と否とは各自の自由なりとは言へ其人生の必要要素なると同時に產業上の必要要素なること明なり否之れなくしては產業は到底成立し得べからざるなり

以上六個の要義は概略說明したる如く何れも產業成立上必要條件にして其一個を缺くも到底產業は成立するものに非ず此六個の要素をして各自に自己の功能を擧げしめ其結果を自己に收得せん事を主張せしめば產業より生じたる結果は其功能の輕重に從て之を分配せざるべからざること明かにして又六要素は各自に其分配を受くる權利あるや論を俟たざるなり然るに近世唱導せらるゝ所の即ち歐米先進國より輸入直譯されたる所の法理、法律並に習慣は單に唯物的に自己を主張するもののみを認め自己を主張する事の薄弱なるもの及び全く自己を主張せざるものを忘却するに至れり

足尾銅山の鑛毒事件、深川淺野セメント工場の塵埃事件の如きは明に社會を害し自然を毒したる事件なり然るに水は自然物なり河川に所有者なし之に鑛毒を放出すること何かあらん空中は自然にして風は時に依り方向不定なり塵埃を以て汚すも何人が故障を申込むべき權利ありやとの觀念より經營者自身も鑛毒塵埃の社會に及ぼす害毒を思料せず否或は思料したりしならんも法律の保護あることを名とし一世に抗顏して顧みる所なかりしに外ならず是れ產業は勞資二要素のみより成立し其結果は勞資二要素にて分配すれば足れり二要素にて分配すべきものなりとの謬見に基きたる結果に外ならざるなり此謬見が原因となり資本、勞働の爭鬪は一轉して階級戰となり再轉して全世界の不安となり終に產業の基礎を覆し人類の文明を逆轉せしめざれば止まざらんとする窮地に陷り以て歐米に於ける現今の勞働問題と化せしなり

第三章　國際勞働會議に於ける五箇條の議案

今回華府に開催する國際勞働會議は振古未曾有の事にして其結果如何は兎も角其趣旨は全人類の幸福を增進すべく所謂正義人道の上より立論したるものにして其堂々たる理論に對しては唯一人として反對の論據を有するものなかるべし左り乍ら冷靜に其內面を觀察すれば資本勞働兩者の爭奪戰は益々甚しく較々もすれば現代の文明を破壞せずんば止まざる如き形勢を呈し所謂進退兩難の窮地に陷りたるを此會議に依り正義人道の基礎の上に一回轉を試みんとする企てに外ならざるなり此會議にして萬一不結果に終らんか紛糾は益々紛糾を增すべく從て第一回會議の議案は最も重要なる意義を有すべきは勿論或は此議案こそ勞資爭奪の紛糾を一掃し得る問題たらざるべからざるなり勞働研究者たる各國の委員が智腦を絞りたる準備局決定の議案なれば世界の大勢上是れこそ勞資協調の根本問題と考へたるに相違なかるべし其議案は

一、一日八時間卽ち一週四十八時間勞働主義の適用に關する事項
二、失職に對する準備並に豫防に關する事項
三、婦人の勞働に關する事項
　イ、出產前後の保護に關する事
　ロ、夜間の勞働に關する事
　ハ、不健康勞働に關する事
四、幼年者の勞働に關する事項
　イ、最少勞働年齡に關する事
　ロ、夜間の勞働に關する事
　ハ、不健康勞働に關する事
五、婦人の夜間勞働を禁止する事、並に一千九百六年ベルン國際勞働會議に於て採用せられたる燐寸製造業に白燐を使用する事を禁止する事の協定を擴充適用する事に關する件

右五議案は何れも重要案件にして勞働問題解決の管鑰たるや論を俟たず吾人は熱心に之を研究せざる可らず宜なる哉學者、政治家、實業家、勞働研究者、商業會議所、學會等勞働問題に直接關係あると否とを問はず研究に研究を重ね甲論乙駁日も尙ほ足らず過激なるあり穩健なるあり共說や千差萬別なりと雖も要するに我國論の歸着する所は五箇條に對しては根本的反對意見を發表されたるが如く卽ち正義人道の見地より根本主義として之に贊成し而して實行に於て幾分の除外猶豫を設けて國情に適應せしめ以て產業の結果に激變なからしむるを希望するもの、如し就中利害關係より主として論ぜらるるは一、勞働時間　二、婦人夜業　三、幼年者年齡問題等なるが就中其焦點は勞働時間問題に在るが如し蓋し勞働時間は現今の我が工業狀態に於て生產力に直接關係を有し又關係を有するものとして一般に認めらるゝを以てなり

新紙の傳ふる所に依れば桝本勞働代表委員は去る十月十四日農商務省內瑞穗倶樂部招待席上に於て其意見を發表して勞働生活の安定は場所（察するに勞働の性質、難易、作業の狀態の意ならん）時間、報酬の三者を以て主なる者とすと言はれ且女工の寄宿舍生活を難じ紡績女工の如きは八時間制よりも寧ろ六七時間勞働を以て可なりとすと斷ぜられたり又武藤資本代表委員は十月六日東京商業會議所送別會席上に於て八時間勞働制は勞働者の保健上及其他の關係に於て果して彼等の幸福を增進すべき正當なる時間なりや否やは大に考究の餘地あり殊に歐米人と本邦人の間には其勞働能率に於て大なる相違あり從て此點に於ても主張すべき事多し云々と稱し八時間制は我國の現在工業狀態に於ては直に採用すべからざるを暗示されたり又同氏は八日瑞穗倶樂部記者團に對し意見を發表されたるが其大要は世間の景氣如何に依り或は忽に優遇し或は忽に解雇し勞働者の榮枯の如きは全く之を眼中に置かざる歐米の現況に依らず我國從來の溫情を主とし家族主義の維持を希望し又時間に對しては八時間制は現在の日本には無理なるが然し余が勞働會議に於て何時間制を主張すべきかは渡米する迄發表するを得ず尙ほ組合を認め夜業は十時より朝五時迄は絕對に禁止したし云云とて特に時間に重を置かるゝもの、如し

其他東京商業會議所工政會等產業界の重鎭たる諸團體の意見は大同小異なるも何れも時間を主要條件とせり

吾人は五箇條議案に對し何等の反對すべき理由を認めず殊に其主要條件たる時間問題に就ては八時間制は原則として結構なれども事業の性質により自ら難易輕重の別あることなれば勞働時間の如きも此の難易輕重に從て之を定むべく八時間なる畫一制のものに非ざるや明なり例へば或輕量の物を運搬するに一時間に二里を馳走するものと一時間に一里を行くものと等しく每日八時間宛勤勞せしめんと欲するも能はざるが如く時間の長短は勞働性質の難易に順應して定むべきものなり

五箇條議案の要旨は前記の如し是れ人道正義の上より必ず解決せざる可らざる目今焦眉の問題にして之が解決は誠に結構なりと雖も之を解決したればとて勞資爭奪戰を免る能はざることは勿論寧ろ此等は枝葉の問題にして根本解決策に非ざるなり試に見よ玆に現在に比して數倍若くは數十倍の生產力を有する機械が發明され工費は從來の數分の一若くは數十分の一にて或物品を製造し得たりとせんか是れ日進月步の今日決して空想と斷ず可からず若し斯る產業實現せば其利益は蓋し莫大なるべし斯る場合に於て此莫大なる利益は之を資本主にのみ獨占せしめ勞働者は八時間制の勞働をなし最低賃金以上の普通賃金を得て滿足し其生產業に喜んで且つ誠意を以て服業すべきや否や斯る場合に於て勞働者は必ずや時間の短縮と賃金の增加とを要求するなる可し決して默して已まざるべし又默せずして要求するは當然の事なる可し而して斯る事實は過去數十年間各事業に於て頻々として起り產業と經濟との狀態は日に月に變轉し從て勞資の爭奪戰は休止する事なく爭鬪に爭鬪を重ねて今日に及びしなり過去既に然り人類は恒に歷史を繰返すものとすれば勞働問題の將來も亦必ず然らざるを得ざるべし斯く觀じ來れば五箇條の議案は決して根本的解決策には非ざるなり

鎌田政府代表委員は去十月六日東京商業會議所送別會席上の演說に於て勞働問題は十八世紀末に發生し漸次喧囂を極め今回の大戰にて一時閉塞したるも媾和成立後猛然として勃發伸張せし

ものなり換言すれば十九世紀は蒸汽電力の發明應用に依る資本家の蓄財時代なり而して現在は分配時代にして勞働問題は此分配の宜しからざるより發生する者にして言はゞ分配過渡時代の產物なり勞働者側も此際從來の歷史、風俗、習慣等を破壞し專ら自己の理想をのみ實現せんとせば勢ひ產業の衰頹を招致するの結果となるが故に勞資の分配に關する出合點を研究せざる可らず必竟產業を衰頹せしめずして勞資協調の分水嶺を見出さゞる可らず云々と述べられたり其說や穩健にして其條理や整然たりと雖も勞資協調の分水嶺は如何にして之を研究し如何にして之を見出さんとせらるるや元來此の問題たる斯る容易のものに非ず歐米先進國に於ては數十年若くは百數十年に亘り先覺者が研究に研究を重ねたるものなるが其苦心慘憺の結果と雖も尙ほ未だ盡さざる所ありて今日の狀態を呈したるものなれば經驗なき我國の研究者が九箇條五箇條等の提案に囚はれ研究を始むるも其結果は歐米の轍を踏み我產業を益々窮地に導く事なきやを憂ふるものなり余は信ず斯る顯象を呈したるは必竟產業は勞資二者より成立するものなりとの謬見を基礎としたるに因るものなる事を

第四章　產業成立の要素と其の利益の關係

產業の成立には一、資本　二、經營者　三、勞力　四、國家　五、社會　六、自然の六要素を必要とし其一を缺くも產業は成立するに至らざることは前述の如し從て次に產業より生じたる利益分配に付き各要素間の關係を少しく論ぜざる可らず

一、資本

資本は利息を得て自ら膨脹するの活力を有す其活力の程度則ち利息の高下は國情に依りて異なれども其國の公債利率に依りて略ぼ標準あり資本を公債に投下すれば言ふ迄もなく何等の思慮勤勞を要せずして利息を得て自ら膨脹す故に公債利率は資本活力の最低率と見て可なり資本を產業に投下すれば產業は時に浮沈ありて公債に比し危險なること勿論なれば其危險の程度に依り利息は必ず公債の利率より多からざる可からざるや論なし若し此利率低位なる時は資本の活力を減殺し資本自己は萎微衰頹すべし故に資本は自衛上活力旺盛なる所則ち利率の多き所に向て集中す且資本には國境なし故に產業を隆盛にし國運を發達せしめんとせば其利息は資本を海外に流出せしめざる程度の利率ならざる可らず資本が利息を要求することは自己存立上の必要條件にして尙ほ固定資本が其減損價格に對して消却基金を要し及び勞働者が自己存立上の報酬換言すれば生活費を要求すると同一意義たらざる可らず左すれば資本が利息を要求するは當然にして產業が資本に對し或程度の利息を仕拂ふは取りも直さず自己の成立を自ら保護する所以の義務なり然らば利息は自己保存上必要の經費にして働きに依て生じたる利益には非ざるなり萬一此利息をも仕拂ふこと能はずんば資本は自滅し產業は自ら滅亡を免れざるべし

資本は產業成立の要素なれば利益の分配を受くる資格あるは勿論なりと雖も既に資本自己の活力たる利率と公債利率に比し危險を保護するに足る利率とを加へたる利息を得たる以上は現今の如く最多額の利益分配を得んとするは蓋し不當の要求なるべしと信ず

二、經營者

經營者が產業經營の經費より報酬を受くるは當然なり事業の盛衰は一に經營者の手腕に俟つもの多し卽ち同樣の事業を同額の資本を以て經營し而も其結果に大なる相異あるは大部分は經營者の技量に所由す故に利益分配を受くるは亦た當然の結果なり

三、勞力

勞力則勞働者の誠意不誠意及熟練不熟練は事業の盛衰に直接影響するものなれば其勞働の効果に比準し勞働者が經費中より報酬則ち生活費を得るの外利益分配を得るは當然の事なり

四、國家

現今國家が產業に對し課稅するは國家成立上の爲めに必要なる國費の徵收にして決して利益の分配に非ず然るに國家は產業成立の要素たるのみならず或特種の產業の如きは特に國家發展の機運に乘じ或は國家危急の時局に際し特別の利益を得る事あり現今戰時利得稅を課せられつゝある事業の如きは此種の產業に屬す尙ほ產業の發展は國運の發展に伴ふものなれば國家が其利益分配を受くるは蓋し當然ならんと信ず

國家が產業より收納したる利益分配金は之れを國家に必要なる產業の保護奬勵費に當つることは國運の發展に資益する適應なる處置ならん

五、社會、自然

社會及自然は利益分配を受くべく自ら之を要求するの責任者なしと雖も而も當然之を要求すべき權利ある確實なる產業成立の要素なり去り乍ら此等要素の利用如何に依りては事業の盛衰に大關係あり例へば漁業、鑛業、水力發電業の如きは社會の狀態自然の形勢に依て事業の運命自ら定まる而して此等の事業が社會及自然を利用することは產業の妙味にして經營者の手腕に依り始めて成功するものなりと雖も此等社會及自然を全く經營者の獨占に委し彼等をして其利益を壟斷せしむべきに非ざるなり利益なくんば則ち止む苟も利益あれば之を社會及自然に分配するは當然の事と云ふべし

社會及自然に對する利益分配金は其產業自身の發展保護を第一として益々其利益を多からしむるの道を講じ次て社會の向上並に幸福增進を圖り尙ほ自然を擁護すべき公營的施設の資に供すべし、其施設は種々ありと雖敬神宗敎の觀念を涵養奬勵するは思想を向上し社會をして自然を愛護せしむる基因なれば其施設をなすが如きは自然を擁護する公營的施設の一つなるべし、而して其局に當る者は而して其公營的施設の局に當る者は產業の經營者を主とし社會有識者の贊助を得て之を處理すべきものならんか

六、產業の利益

現今一般に唱へらるゝ所の產業利益とは一、資本金の利益二、固定資本消却金の二者を含みたるものなり而して其事業にして利益なくんば此二者は之を支拂はざるを通則とするものゝ如し去り乍ら前陳の如く資本に利息を與へざれば資本は自滅し又減損すべき性質の固定資本に對し消却資金を積立ざれば該資本金は自然に減損し怎くて產業は破滅すべし故に此二者は利益の有無に拘らず之れを支拂ひ或は積立つるは當然の事なりとす然らば現今唱へらるゝ所の利益は眞の利益に非ず前記二者を控除したるものこそ眞の利益にして此利益こそ產業成立の要素に分配すべきものなり

七、利益配當

現今稱呼せらるゝ利益配當なる語は利息と利益分配とを併合したるものにして之を適應に分割按配處理するは當然の事なるべし

現今世間に行はるゝ所の五割七割若くは十割なる利益配當を當然なりと稱し堂々新聞雜誌等に其意見を公表して憚らざる論者あり而かも有識の士にして此論をなす者あり又事業社會の株式則ち資本主は轉々流通するものにして今日の株式所有者は事業當初よりの所有者少く多くは高價を以て株式を買入たる者なれば七割十割の配當も資本主に對しては其の實九歩或は一割の利廻りなり故に七割十割の配當は當然なりと言ふ論者あり余は此等論者の呼稱する理由を解するに苦しむ何んとなれば等しく人類幸福の爲めに國家の繁榮の爲めに其必要に應じ經營する事業なるにも拘らず其性質の如何に依り例へば甲電燈、瓦斯、機械製造等の如き事業は一割內外の配當をなし乙航海、紡織等の如き事業は五割七割の配當をなすとせんか此等甲乙何れの事業に投じたる資本も等しく資本にして固より其價値を異にするものに非ず又經營者の智能も甲は魯鈍にして乙は銳敏なりしが故に利得を異にしたるに非ず何れも有爲有能の士にして而も等しく奮勵努力し乍ら偶々甲は一割なるに乙は七割となりたるなり若し經營者の如何に依りて此差を生じたるものとせば甲業經營者は社會に對し資本に對し申譯なき次第なり然れども此の如き差を生ずる主なる原因は經營者の技能如何に依りて生ずるに非ずして產業成立要素の機運が然らしめたるものなり然るに論者の如きは產業は資本を主とし勞働を從としたる資本勞働の二者よ

り成立するものと誤斷し利益は資本にて壟斷して可なりとの舊思想を基礎とし而も是非改正を必要とすべき現行法律を楯として金力萬能主義を維持せんとする頑迷論者に外ならず斯の如きは到底世界の潮流たる新思想と相容れざるものなるべし

八、産業利益の分配

産業利益金は如何なる割合に於て産業成立の各要素に分配すべきか元來産業は其性質千差萬別なるが故に成立要素が斯業に致す効果は一樣ならず資本を最必要とするものあり經營者を最必要とするものあり勞働者を最必要とするものあり從て分配率は之を其要素の必要の程度に順應せしむることは當然のことなりとす然り其必要程度に比例したる比率を定むることは困難なるべしと雖も其は現在社會に於て何の基準なく又誰れ爲すと云ふことなく需要供給の自然の程度に依り各種職業の賃金に略々一定の標準あるが如くに各種性質の異りたる事業も其分配率は各地を通じ漸次類似のものとなり略ぼ定まりたる標準率を得ること蓋し困難ならざるべし假えば玆に七割の配當をなす産業の株式會社ありとせば此配當の外に相當の控除金あるが故に總利益金は十割以上なるべし故に之を十割と假定し其中より一、法定積立金五分　二、資本金に對する利息八分　三、固定資本減損消却積立金五分合計壹割八分を控除したる殘余の八割二分は即ち純利益金にして此純利益金を前に列記せる各要素に分配すべきものとし其分配科目を假定すれば一、資本　二、經營者　三、勞働者　四、國家　五、非常準備配當準備積立金六、改良研究資金　七、社會幸福增進資金　八、後期繰越金等ならんか

第五章　勞働代表者選定協議會の意嚮其他

國際勞働會議に出席すべき勞働代表者選定協議會は去九月十五日農商務省に於て開會せられたり新聞紙に依り公表せる如く該協議會は粉擾に粉擾を重ね開會四日漸くにして三人の候補者を選定せりと雖も第一、第二候補者は結局辭退し第三候補者代表委員となり去十月十日伏見丸にて出帆渡米し我國勞働問題の第一頁は一段落を告げたり

右協議會の內容を見れば協議會員七十五名中自ら筋肉勞働派と稱する者約二十四五名資本家色彩の者五六名其他約四十六名は嘗て勞働に從事したる者或は工業教育を受けて工場生活に入りたる者にして現に職工の取締或は工場監督に從事するものなり元來勞働とは如何なる範圍の勞働に從事する者を指稱するや其範圍漠として一定の規劃なし故に勞働者の代表者として集合せる協議員が種々雜多の性質より成れることは止むを得ざる事情なり故に何れの協議員と雖も代表者として自ら不適當なりと信ずるの根據あるなし然るに筋肉勞働派と稱する協議員は勞働者とは現に筋肉的勞働に從事する者にして從て勞働會議に派遣すべき其代表者は現在の筋肉勞働者ならざる可からずとの解釋を有する者の如く斯くて自派以外の協議員との間に自ら意思の疎通を缺きたるの觀あり且つ其反面には資本家の指命を帶びたる協議員ありて現筋肉勞働者を壓迫するものならんとの猜疑ありしが如く察せられたり之れ紛擾を釀したる一原因なり又協議員を選出する方法組織を政府當局者が誤りたりとの意見を抱く者ありしは一の原因なり何れにしても紛擾は即ち紛擾なり其近因は概ね前記の如くなりと雖も眞の原因は金力萬能資本萬能の現行主義を採し利益分配を公平にし人生の幸福を享有せんとする人類共通の慾望こそ眞の原因に相違なきなり此目的を達せんが爲めに筋肉派は露骨に卒直に急激に成果を收めんとし衆餘の協議員は成る可く急激の變化を避け確實に穩健に成功せんと希望したるのみ換言すれば其目的は一にして唯其手段に緩急の差あるに過ぎざりしなり

協議會に於ける空氣は前記の如し而て協議員の素質を見るに其何派に屬するを問はず何れも多年の經驗と熟練とを積み勞働界に於ては千軍萬馬の間を往來したる勇士にして何れも一方の頭梁なり此等諸氏の思想は我勞働界の思想を代表したるものにして此旺盛なる元氣は我產業を隆盛ならしめ其意嚮は我國產業界則我勞働界の意嚮を指導するものと言はざるべからず

近頃世に勞資協調なる新語あり若し圓滿に協調解決せんと欲せば其關係者有志者は勿論社會の先覺者爲政者は充分の研究を要する所なるべし

一、資本家の自覺を要す

過去は論ずるの要なし現在に於て我國の或る種類の產業に於て見るが如く五割七割乃至は十割なる巨利を占めつゝある資本家は抑も何國に在りや殊に物價騰貴國民生活難の今日世界の思潮はデモクラシー(自由、博愛、平等、を基礎とし社會の秩序を重んずるもの)に傾きつゝある現狀に於て資本家獨り巨利を占守しつゝあるの現狀を維持せんとするは資本家自體の永遠の幸福を圖る所以に非らず否自ら進で公平に分配せんとの自覺をなすは最も緊要にして賢慮に富む所以なるべし萬一金力萬能主義を維持せんと欲せば世界の思潮は勿論我勞働界思想の大勢は玆し激動する恐れあるべし

元來資本家は自己又は關係者勤勞の結果に依て資本を擁するものなれば之を活用するも將た死用するも自由にして他より容喙すべき理由なきが如しと雖も他面より觀察すれば資本は國家の資本にして資本主は國家保護の下に自ら之を自由に使用する權限を委託せられたる者なりと解釋することを得べし而して其委託せられたる使途は國家併に國民の幸福增進の爲めならざるべからずと解釋することを得べし若し斯る解釋を穩當とすれば資本家たるものは世人の怨府たるべき榮譽の爲めに資本を濫費することを謹み須らく國家有益の產業に向て投資し資本保護の爲めに相當の程度の利息を得たる以外の利益は國家並に產業に對し盡力したる他の要素と共に之を分配し以て共存共益の途に出でざるべからず換言すれば資本家は勞働者及其他產業成立の各要素と互に相提携して益々產業の發展繁榮を圖るの大公共心なかる可らざるものなりと信ず

一、勞働者の抱負

余は自ら勞働者なりと信じて疑はず其筋肉的たると智能的たるとを問はず等しく產業に對する勞働者なり產業の要素は前述の如く獨り勞働者のみならざるや明なり余等は產業の一要素として精勵努力尙ほ利益なくんば自ら足らざるを悟り益々奮鬪せんのみ苟も利益あり公平の分配を得ば共に相提携して向上發展し恁くて國家を利し社會を益するを得ば人間の本分として快哉之に過ぐる者なかるべしと信ずるものなり

近頃外電の傳ふる所に依れば英米諸國に於ては勞働者は單り產業の利益を收得するのみならず其支配權をも併せて掌握せんと爭ひつゝあるが如し其程度及其組織を如何にすべきの詳細を知る能はざるも或は彼等が多年壓迫を受けたる反動として國家公衆の利害を判別するの餘裕なく此戰後人心は荒廢し社會の秩序恢復せざるの機に乘じて腹の蟲いやせ的行動を取り所謂餅は餅屋なる職分の常道を逸したる行動ならんか萬一然る時は余等日本國民たる者は前車の覆るに鑑みざる可らず殊に我國體は彼等と全然異るあり君民一致和衷協同の三千年の歷史は決して汚すべからざるなり否彼等の擧に倣はず長を採り短を補ひ以て光輝ある歷史を子孫に遺さざる可らず上記の主義を實行するには種々の準備と各方面に於ける具體的調査研究とを要するは勿論殊に現存の產業團體に就ては其成立が法人たると個人たるとを問はず其現在の作業に應じたる資產狀態を或一定の時期に於て調査精算するの法律を設定し全國に亘り適當の調査委員會を組織し公平を期待し得べき調査をなし以て資本に對する利息の基礎を定めざる可らざるものと信ず其他種々複雜なる問題多々ありと雖も玆には唯主義の概要を列記したるのみ

尙此主義が穩健に實行せらるゝときは株式市場の亂高下は幾分緩和すべく又資本を擁して安逸遊惰に日を送る所謂高等遊民を減じ各自其力量に應じて事業經營の爲めに活動するを得べく斯くて世を毒する投機心を抑制する傾向を生ずるなるべし

此稿を終るに望み余は重ねて言はんと欲す今次華府に開催せる勞働會議に於ける五箇條の問題

及び最低賃金制度の如き成程緊要なる問題に相違なきも何れも枝葉の問題にして決して勞働問題根本解決の要素には非ざるなり故に今日の如き狀況に囚はれ徒に歐米に於る現狀調査のみに苦心沒頭するが如きことあれば彼の跡を逐ひ惑ては我產業否我國を破滅の途に導くものなり何れにしても今や各階級を通じ自覺決行すべき時期なれば速に上記主義の實行を希望し若し此主義以上の良策あれば其方面を調査したる上之れが斷行を希望して止まざるものなり玆に謹で先輩識者の高敎を乞ふ

形骸

笹川篁堂

國際道德の賴みにならぬ今日、國家の安危は國民の双肩にかゝる一大責任である、國民理想の高低は、文明の要素に關係ありとせば、宗敎の意義低劣なる多數國民の信仰狀態は大なる國家の禍である、空しく形骸に囚はれて精神の富を思はざる、現代人心の趨向に對し敎化の責任ある多くの宗敎家は、豈に袖手すべき秋でない。

六百年の昔鎌倉時代に於て、蒙古襲來の國難にあたり、日蓮といふ偉大なる人物を出したる吾が國が大正多事の今日、何故に代表人物の現はれないか、九ケ年以前に他國侵逼難を叫び國民思想の健全を護國の一要件としたる、日蓮は彼の文永五年一月十八日蒙古國の牒狀到來して殆んど一ケ年何等對應の方策なきを嘆き、文永五年十月十一日北條時宗宿屋入道平頼綱北條彌源太建長寺壽福寺極樂寺多寶寺淨光明寺大佛殿長樂寺へ國家大事を處理すべく慫慂せられた、所謂十一通御書として現存するもの、その時宗に送れる御書に

「諫臣國に在れば則ち其の國正しく、爭子家に在れば其の家直し、國家の安危は政道の直否にあり、佛法の邪正は經文の明鏡に依る、夫れ此の國は神國なり、神は非禮を廢け給はず天神七代地神五代の神々其の外諸天善神等は一乘擁護の神明なり、乃至大忠を懷くが故に身の爲に之を申さず、神の爲め君の爲め國の爲め一切衆生の爲に言上せしむる所なり」と

此の國家大事の場合に於て、偷安の態度にあるが、早く責任を果さないかを警告し、自己の弟子信徒に對しては、大蒙古國の牒狀到來に就て如く羅漢の如く、平生歸依渴仰を受くる者が、

十一通の書狀を方々へ送りたれば、日蓮の弟子檀那流罪死罪一定ならん而已と、用心覺悟すべき旨を訓戒せられた、業に寺院存在の意義を喪ひ、國民敎化の本務を忘れたる彼等の形骸に對し、後年文永八年九月龍口の法難の前日、平頼綱に對し、

「佛法は自身の爲に修すべからず、佛法は靈驗を得る爲に修すべからず、佛法は果報を得んが爲に修すべからず、佛法は名利の爲に修すべからず、佛法の爲に佛法を修すべし」と以上取意

喝破して居る、殊に禪宗の敎義信條は決して是迄述べられた、寺に送れる文書を綜合すれば佛の如く、平生歸依渴仰を受くる者が、此の國家大事の場合に於て、偷安の態度にあるが、早く責任を果さないかを警告し、自己の弟子信徒に對しては、大蒙古國の牒狀到來に就て十一通の書狀を方々へ送りたれば、日蓮の弟子檀那流罪死罪一定ならん而已と、用心覺悟すべき旨を訓戒せられた、業に寺院存在の意義を喪ひ、國民敎化の本務を忘れたる彼等の形骸に對し、後年文永八年九月龍口の法難の前日、平頼綱に對し、

「佛法は自身の爲に修すべからず、佛法は靈驗を得る爲に修すべからず、佛法は果報を得んが爲に修すべからず、佛法は名利の爲に修すべからず、佛法の爲に佛法を修すべし」と以上取意

喝破して居る、殊に禪宗の敎義信條は決して是道隆良觀等の首を由比ケ濱にて斬るべしと、痛言せられたるは決して驕激でない、願ふに釋尊は沙門に四種あることを宣示せられて居る、

一　形服の沙門
二　威儀欺誑の沙門
三　名利貪求の沙門
四　實行の沙門

形服ばかりの僧、威儀欺誑の僧、名利貪求の僧等は稻麻竹葦のそれの如く今も尙、全國に充滿して居るではないか、不惜身命の分野を明かにして、護法扶宗の道に盡す實行の僧は誠に少ないのは、憂慮に堪へない、

形骸的堂塔僧侶の生氣なきは爭ふべからざる實情であるが、更に怨すべからざる違法は名利貪求の爲に、敎義信條に反し國民を愚にする、迷信の行爲である、二三例を擧ぐれば、豐川稻荷小田原の道了鎌倉の半僧坊の如きは、敎外別傳不立文字見性成佛を信條とする禪宗寺院に奉祀して居る、柴又の帝釋池上の長榮稻荷持病專治の秋山靈神の如きは、日蓮宗の寺院にある、對外警策として論ずれば曹洞宗の開祖道元禪師が、學道用心集に

「佛法は自身の爲に修すべからず、佛法は靈驗を得る爲に修すべからず、佛法は果報を得んが爲に修すべからず、佛法は名利の爲に修すべからず、佛法の爲に佛法を修すべし」と以上取意

喝破して居る、殊に禪宗の敎義信條は決して是

を許容すべきものでない、然るに名利の爲に之を祭るのは、道念と誠心が缺けて居る事を實證するのである、また對內警策として論ずれば、立正安國の忠誠を表明し、開驅統一の主義を宣傳したる、日蓮の敎義信條は斯る劣等なる迷信を許容しない、恬然として耳を知す利欲の爲に

基督敎徒としての大矢氏に與ふ（其三）

金島英夫

□近來日本で共產主義者、民主々義者及び友愛會等の不當なる行動は多く基督敎信者から起り現在の日本に於ける社會を根本的に破壞せよと云ふ狂氣じみた『新人會』も基督敎會に立て籠つた人々から叫ばれてゐるでは無いか。

□先に朝鮮總督の赴任に當つて九月二日京城南大門で爆彈を投じた兇漢が姜宇奎といふ耶蘇敎傳導師であつたり、現在上海の佛國租界內に組織してゐる朝鮮獨立陰謀團が國務卿李承晩以下十二人で有名なる全復も居るが其內に二名の米人宣敎師が顧問として居る事は何事を物語つてゐるか。

□また京城赤池警務局長は宣言中に『宣敎師は常に愛を說き世道人心に貢獻するものとし深く敬意を拂ひ居たるに今回獨立運動の裏面に煽動的事實を發見せり』と發表して上海假政府議員

□近來日本で共產主義者、民主々義者及び友愛會等の不當なる行動は多く基督敎信者から起り現在の日本に於ける社會を根本的に破壞せよと云ふ狂氣じみた『新人會』も基督敎會に立て籠つた人々から叫ばれてゐるでは無いか。

□先に朝鮮總督の赴任に當つて九月二日京城南大門で爆彈を投じた兇漢が姜宇奎といふ耶蘇敎傳導師であつたり、現在上海の佛國租界內に組織してゐる朝鮮獨立陰謀團が國務卿李承晩以下十二人で有名なる全復も居るが其內に二名の米人宣敎師が顧問として居る事は何事を物語つてゐるか。

□また京城赤池警務局長は宣言中に『宣敎師は常に愛を說き世道人心に貢獻するものとし深く敬意を拂ひ居たるに今回獨立運動の裏面に煽動的事實を發見せり』と發表して上海假政府議員と稱する耶蘇敎徒金廣除から京城耶蘇敎神學校生徒朴鎭恩に送つた手紙を示した。

□それは『國內同志に與ふる文』と題する文書に就てゞあつて獨立の爲め祈禱をするとか、大韓民國臨時政府の祈禱復興事業、統一獨立運動、自由獨立の完成を慫慂し、又鮮內四十二敎會は大韓獨立の爲め毎日必ず一回祈禱するなど不穩の事實を見るは當局の最も遺憾とする所なりと敎會に向つて局長は反省を促した事實に見るも基督敎徒が如何なる思想を有つてゐるかは分る筈である。

□砲兵工廠で八月の中旬から下旬にかけて紛議を起した中心の十八名程の人は如何なる人々であつたか。

□特に最近私は基督敎に對して佛敎徒は一段の確信を以て起たなければならぬといふ事實に遭遇した。

□海老名彈正氏の根據たる本鄕敎會で尾島眞治といふ牧師が、佛敎批判として演べた內に甚だしい誤謬を抱いてゐる事を發見した。

□私は講演が終つてから講演會場で牧師に質問を求めたら、牧師室に來て呉れといふ。そこで私は數人のクリスト信者に擁せられて二階の牧師室で不審を質した。

□私は第一に『あなたが唯今論ぜられた論は一冊の經文を引用もしないで、單に大乘起信論のみで論斷せられるとするのは誤りではありませんか。申す迄もない『起信論』は馬鳴論師の著で馬鳴菩薩は佛滅後五百年乃至六百年の人だとせられてある。

□併し目下帝國大學の文學部で、村上專精博士の論講してゐらるゝ處に從へば、馬鳴の作だといふ事は、其文體、其論法から見て甚だ疑はしい。確に支那人の作だと發表さへされてゐる。其の疑はしい論に依つて經に依らないあなたの態度は甚だ如何かと思ふ。

□あなたは第一經文は何と何とをお讀みになりましたか、華嚴から說き起こされた一代佛敎の何れをお讀みになつたのです。

□法華經を、持に一代佛敎の歸結としての法華經をも讀まないで『喬闖努力主義がヤソ敎で、其反對が佛敎だ』など、論ぜらるゝあなたは一體日蓮主義の何物たるかを御存知の上で御斷案

なつたのですか。

□經よりも論の方が尊いとか、華嚴經は佛說ではないとか云はれますのは如何なる論據に依らるゝのですか』といふのが私の質問の大要であつたが、殆んど緒つた答辯を聞く事は能きなかつた。

□最後に私は金森通倫氏の著「信仰のすゝめ」の中だつたと思ひますが、天照大神其他祖宗の神靈は神では無いと書いてありましたが、あれは如何にお考へですか』と亂ねたら『金森氏とは全然信仰が違ふから』と云つて返答を避けやうとした。

□そこで私は更に『金森氏は兎も角として、あなたは天照大神其他祖宗の神々を如何お考へですか、あなたのお考は一といふと『神ではない』と答へる『然らば伊勢の大廟乃至今將に竣成せんとしてゐる明治神宮を何うお考へですか』と問ふと『あれも何でも無い』と答へた。

□此の拙文を讀んで下さるお方にお願します。どうぞ此最後の言葉を忘れないで下さい。私はその言葉を聞いて吐嗚りつけ樣かとも思つた。

□併し其場で一時の感情に驅られて吐號する代りに、隱忍して胸に收めた私は一生を通じて絕叫して日本の人々に訴へたいと思つて『私の耳は是れ以上そんな言葉を聽くに忍びません』と云ひ放つて闥を排して去つた。

□是等二三の事象によつても基督教が如何なる感化を人心に與へつゝあるかと云ふ事は明である。大矢氏は是等の說明を何とする。また是れより外に、そして是等を打消すに足る有力なる國士義人を如何なる例に依つて擧げ得るか。

□私はゆふべ松尾敏城氏の宅で最も尊敬すべき一人の勞働者に會つた。私は昨夜其人と席を同うして語る間、何といふ敬虔の念が私の腸に滲み込んだ事であらう。

□みすぼらしい砲兵工廠の職工服は元帥の正裝した服にも劣らぬ輝きを以て私の心を射た。

□山田博士が曾て『猪俣金太郎君は國の寶だ』と云はれたと云ふ猪俣氏其人である。

□砲兵工廠で同盟罷工の議が起り、相當の上役にある者すら躊躇、逡巡してゐる時、毅然として組長連を勵まして、

□『君等は一體何を愚圖々々してゐるんだ。私共は今迄養つて貰つた恩のある國家に對して反抗する法が何處に在る。給料を上げて貰ふのは良いかも知れないが、不當な手段で國家に反抗する程侯等の腸は腐れてはゐないよ』と

□斷然と排して非常な迫害と壓迫とにも恐れず主義を貫徹したのは猪俣氏及び其れらと主義を同じうする一味四十人程の人々である。一萬何千人の職工中たつた四十人、何といふ情ない事であり、何といふ其れ等の人は美はしい人々であつたか。

□猪俣氏は身體の小さい、可なり年も老いた人であるが彼は日蓮主義者である。晝食の時間が四十五分と與へらるゝ夏の間は、食後十五分なり二十分なり必ず演說して數年の間、人生を說き、國恩を述べ、佛恩に感謝してゐた。よし雨が降る日でも風の吹く日でも。

□事の成るや一日にして成るに非ずで、猪俣氏の敎ゆる處は平素は目にも見えないが、こんな事變に遭遇した時は判然として他の者と覺悟が異つてゐた。

□『此の場合だ、假令一身は殺されても』といふ殊勝な決心がそれ等四十人の人の顏には漲ぎつた。是れが眞の國體觀念に覺醒めた宗敎の力でなくて何であらう。

□砲兵工廠の何れの部にも必ず一人か二人は彼れの主義に贊成する人がゐたのは不思議中の不思議である。二十何日に亘る紛擾の間、それ等日蓮主義の人々の誰れかゞゐた。甲が强迫せられて休めば乙が出ると云つた風に……それが爲に仕事はよし出來ないにしても機關だけは運轉を續けた。だから砲兵工廠の同盟休業は遂に成り立たなかつたといふ。

□私が基督敎を排し日蓮主義を高調する所以のものは敢て宗派的小我の偏見に囚はれたが爲ではない。基督敎の不徹底なる主義が我國古來の美風をも破壞せんことに反對するのである。

□日本の民主々義者は、社會主義者の一派を除いては、殆んど申合せた樣に皇室の存在を否定しないけれども、世人は靜かに世界の大勢に眼を轉じた時何者を見るであらうか。

□米國で知名の社會學者トールスタイン・ベーブレン氏は戰時中の著者『世界永久平和の考察』中で何と云つた。

□『眞の平和を持ち來す爲には各國は、君主政體の獨逸と日本の配下に立つか、然らずんば各國は此二國の內政に迄も干涉して國家主義を破壞し民主々義を布くかの何れかである。

□各國が二國に支配されるなどといふ事の不可能は申す迄もない。然らば必然的に世界各國は力を協せて日・獨の二國を亡ぼさねばならない。是れが眞の平和の殿堂に到達する最善の法だと論じてゐる。これは學者の眞面目な研究として論ぜられてゐる。

□世人はこの事實を何と見る。私共が眞の國家主義を叫ぶのは眇たる一宗一派の利害關係に立脚してゐるのではない。國民一般の覺醒し、奮起すべきが故であることを察せられたい。血の雫の滴る如うな奮鬪を續けられた日蓮聖人の主張も行動も、其處に立脚點を有してゐられた事を忘れてはならない。

〔附言の一〕 以上私は法敵としての大矢氏を擊破せんとして猛烈に當つたけれども、素より私に取つて私怨私恨のあるのではない。法を思ひ國を思ふの微意に外ならないが、論鋒に失した點は茲に改めて謝する。

〔附言の二〕 これは『統一』に轉載する時の附言である。昨年秋、統一團で日蓮主義都下學生聯合會へ帝大から私が出演した時、雜誌『法華』誌上で、私の尊敬してゐる若い某氏が……併しまだ面晤したことは無いが……仙山石といふ匿名で私のキリスト論を論難せられてあつたのを拜見した。あの時の私の本論は法國冥合を說いたので、キリスト敎論はたゞ一言序說のうちで申したまで、而も二十分やそこいらの興へられた時間に詳細に說く事の不可能なことは申すまでもない。若し間違つた點を更に御高敎下さるなら雜駁ではあるが本誌で發表したものに就て御批判を乞ひたい。間違つてゐるなら何時でも改めます。

御涅槃會と御降誕會

妹尾義郎

大聖釋迦牟尼世尊は今を去る二千八百六十七年の昔二月十五日の夜半、拘尸那迦羅城外なる沙羅双樹の下に安詳として御入滅遊ばした。そして六百九十九年前の二月十六日の拂曉、末法の大導師たる日蓮聖人は、房州小湊の浦に御降誕遊ばした。偶然の如くにして而も偶然と思はれざる此事實こそ吾人が深く研鑽すべき一大事因緣である。

何をか一大事の因緣と云ふ。此の二大事實の連鎖によつて、宇宙の神秘は開顯せられ、衆生の迷悟は日本帝國の榮貴と使命とは闡明せられ、統一せられ、我が佛化せられ、世界文化の隱著は表示せられ、探れば萬古不易、甚深微妙の哲理が現はれ、仰げば永劫不滅、慈悲廣大の宗敎が輝く。是こそ世界を靈治すべき東洋の大文明、吾生が一切を捧げて光揚宣傳すべき一大眞理の事現である。

顚倒は今の世の相である、上下が顚倒し、是非が顚倒し理非が顚倒し、智愚が顚倒し、靈肉が顚倒し一切が本末を誤つて經の所謂衆苦充滿の娑婆である而も亦「衆生其の中に沒在して歡喜し遊戲して、覺えず知らず驚かず怖ぢず、亦厭ふことを生ぜず、解說を求めず此の三界の火宅に於て東西に馳走して、大苦に遭ふと雖も爲れを以て患とせ」ざる大顚倒の社會である。而して此の根本敎濟の一大法綱こそ御入涅槃から御降誕に靈續する南無妙法蓮華經の梵音である。此の梵音に即顯する佛陀の御委こそ不滅の眞理であり、無緣の慈悲である。顚倒の胸腦を開いてみ佛を仰ぐ者のみ眞の靜けさや、眞の樂しさを味ひ得る、金剛の力が湧き不滅の光が輝く、これぞ眞の親鸞である矣。

黎明の鐘は殷々として鳴る。最早や、嘗度もないキリストの再臨や、虛禮の贈答に浮れるクリスマスの夢から醒めねばならぬ。少くとも五年に亘つて神の子と神の子とが血潮を流した世界大戰の慘禍を省みて、其原因を察知し得る有能者は覺めねばならぬ、猶も神の再臨などを信ずるの輩は、簑を執つて屋上に登り上天の羅星を取らんとするよりも愚である、痴である顚倒である。進んで永久平和の基根を建立せんとするの士は須らく佛陀世尊が遺し給ふた法華經を身に讀み給ふた聖日蓮の叫びを聽くべきである。

米嶺の淵に沈溺した坊主や俗信家が唱へる南無妙法蓮華經の陀羅尼聲を以て、日蓮主義を見捨てゝはならぬ。正しき南無妙法蓮華經の靈光こそ拔苦與樂、顚倒の衆生を根治して四海を太平ならしむる楔子である。

あゝ二月、早梅の淸香と共に想起涅槃すべきは十五日十六日と續く御入涅槃と御降誕の尊さである。讃佛歌うたひて稱へんかな〳〵

惱みの海に漂ひて幾夜か我はおのゝきし
今歸りけり寂光の岸邊に妙の燕ぞ咲く。
法のみ風にまがつみの夜のとばりも消えうせて
しのゝめ告ぐる聲の聲も妙なり旭森。

戰は開かれたり矣

看よ、勇躍奮進せる同志の軍容を

知法恩國の祖訓を體し、不惜身命の嚴誡に鍛はれたる日蓮の門弟子は、思想界の現狀を觀て豈に憤慨せざらんや、憂國の至情逝る所猛然として同志は起てり矣、看よ、目醒ましき其の活動振を、曰く統一閣の運動、曰く法華經講義の開設、曰く巡回教化、曰く「統一」の刷新、曰く擴張、曰く自慶會の活躍、曰く何、曰く何。而して其の事に從ふ者は凡て之れ一死以て大法と君國とに酬ゐんとするの志士なり其所に風起り雲捲かざらんやは。日本國の興亡安危は大聖日蓮の誓ひし如く、六百五十年後の今、正しく吾人日蓮の門弟子によりて負荷されんとせるなり。

◎法華經講義の開設

東洋文明の權威妙法蓮華經八卷は、實に今の思想界に最後の歸趨を指示すべき最高批判なり其の講義を本多總裁猊下に請ふて、東京市及地方の四大都市に於て一齊に開催せんとするは其の意義豈に一往にして止らんや。先づ其の開設の辭を看よ、

法華經講義開設の辭

今や東西古今の思想澎湃として我國に會湊し、雄々相磨して雌雄を一擧に決せんとす、實に一代の壯觀なり。然れども若しこの思想の戰鬪に於て不覺を取らんか、或は我が國運の前途を謬るなきを保せず、豈誠心せずして可ならんや。同人こゝに見るあり、相會して法華經の秘奥を開拓し、廣く世人と倶にその要訣を體得し、以て民心の歸趨を善導せんと欲す由來東洋文明は精神文化に於て世界に冠絶し、而してその樞軸を占むるものは佛教なり、又佛教大藏經中に在り「最上第一」を以て稱せらるゝものは法華經八卷なりとす。故に法華經は人類文明の中堅にして東西古今の思想を開顯統一する根本基準なりと謂ふべし、之に由つて此經に精通せずして文明の建設を論議するは過てり。曾て聖德太子は此經を推尊して國の妙典と稱し、攝んで以て一切經の頂上に置けり。又傳敎大師は此經を奉じ、毅然として南都六宗を統一し、日本國を擧げて法華一實の國と爲せり。日蓮大士出づるに及んで此經を以て國民敎化の大本と爲し、敢然として立正安國の大義を唱導し、以て法華一乘の妙旨を宣揚せり。故に法華經の聲價は世已に定論ありて、渴仰歸依の士女都鄙に充てり、嗚だその眞意を信解するの機會乏しきを憾と爲すのみ先師歎じて曰く、深きこと蒼海の如く、高きこと須彌の如く聞かなること盈月の如く明かなること日輪の如しと、復以て法華經の眞價を知るべきなり。今幸に斯道精通の講師を得てその講義を開催し、以て天下求法者の渴を醫せんと欲す、請ふ有緣の士女この擧を隨喜し、陸續來聽あらんことを、

而して其の第一回の講義は、名古屋市常德寺に於て二月二日（雨、聽衆六百人）同三日（風、寒氣烈し、聽衆七百人）及び同四日（晴、聽衆八百五十人）京都市妙滿寺に於て同五日（雪、聽衆百五十人）及び同六日（微雨、聽衆二百人）神戸市布敎所に於て同七日（晴、聽衆百五十人）大阪市蓮成寺に於て同十日（雪、聽衆三百人）東京市統一閣に於て三月下旬より開始、何れも喜悅と熱誠を以て來集せし求道の士女に向つて豫定に幾倍せる盛況を以て開始せられ、爾後每月繼續して開催さるべしと、

◎巡回敎化

薄暗い本堂の中に坐つて、木魚を叩いて御經を讀んで居る日本の坊さん達よ、佛樣は木像に刻んで安置してあるから、何時でも本堂の中に實在せらるゝ如く思ふのであらうが、眞正の佛樣は常に大慈悲を以て懶める人達を救はうとして居らるゝので、衆生の側に下りて活動して居られる、愚かしき日本の坊さん達よ、速かに醒めて須らく巷に出でゝ法を說け」と、之は印度の碩學タゴール先生が先年我國に來朝せし折、眠れる我佛敎徒を警めた言葉であるが、一層下句淺草田中町に於る巡回敎化を最初の講演に、今回の事業の根本精神を設明されたのであつた。實際山の中でも林の中でも狹い部屋の中でも即是道場の思想は阿含より法華に至る大藏經中に、一貫せる所であり、又鎌倉時代に山間の佛敎が市井の間に移轉せし折そこに考察さるべきであつた日蓮上人が小町の辻に立つて途行く人々に師子吼されたのも、矢張りこの思想から來て居る。吾人は徒らに大きな本山の內に隱れて意義なく日月を送る事は出來ない、特に動搖せる思想界の現狀を見ては我國の前途に恐るべき暗雲の湧たを憂へざらんとするも能はないので今は大正の安國論の出現すべき時なりと思惟する。微力ながら國家の安危を擔ふべき一大責務を自覺して、各方面に奮鬪しようと考えたが、その一つとして細民部落に這入つて、彼等に宗敎心復活を計り、及び充分に國家觀念を打込んで置きたいと思つたかくて、巡回敎化は生れた、そして其の第一回の事業は左の日割で淺草と品川とで施行された。

一月廿六日、同廿七日、淺草區田中町に於て兩日晝子供會（每回來會者三百名）兩日夜法要及講演（兩夜共來會者三百五十名）

一月三十日、三十一日、品川町二日五日市に於て、兩日晝子供會（每回來會者二百五十名）、兩日夜法要及講演（兩夜共來會者三百名）

落淚しては居るが矢張り人の子である、彼等にも親もあり家もあり、人情の暗黑の平面を傳さに味ふて皮一重奧深くつゝけば一倍の血も涙もある。故鄉に葬つた兩親の墓參、思出なつかしき故舊の追善も、心には忘れないが其の日〳〵の生活に追はれて思ふに任せない、さぞ悲しい、やるせないつらい、事のあつたらうと考へるが、そこへ我勤く寺は動いて行つて、當代の碩德本多大僧正猊下親修の下に法要が營まれた、如何に彼等は喜んだか、泣いて〳〵手を合せて曾時言葉を發し得なかつたお婆樣もある。眞に崇高なる光景であつた、そしてこの場に連つた應援の信徒連迄もが感激して燃ゆる樣な信仰を新にした、佛陀の惠光は十二分にうごくてらの天幕の內の夜を支配して居つたのである。そして感激した人達に對して本多猊下等から四恩の敎、信仰の功德、國民の覺悟、世界の趨勢、日本國の使命等が平易懇篤に說き聞かされた、彼等はよく聽いた、よく理解した、私は曾て此の如き優良なる聽衆を見たことがない。宗敎心の萌芽は僅か一回にして充分に芽ぐんだ。又彼等は矢張り日本人であつた、否彼等の部落は偶然の放れ小島であつて、まだ今の險惡なる思想に冒されざる純良なる陛下の赤子であつた。會合の終に國友部長の發聲で三唱された天皇陛下萬歲の聲は僞らざる誠心の奧底から叫ばれて、確かに九重の雲井の上迄徹したらうと思ふ。

◎自慶會の活躍

勞働問題の勃興によりて其の任務の重きを加したる自慶會は、客臘十二月一日總會を開いて會規を變更し、新に幹部の役員を刷新增員して、福田中將を新理事長に鹽田內田今岡博士、武田工學士、內田淺野大塚氏、野澤少將を新理事に增員し、又本部の擴張と地方支部の創設とを決議せしが、超えて新春一月九日築地水交社に理事會を開き、基金の勸募、財團法人の組織とを決議し、及び名古屋神戸京都大阪等の支部創立に關する經過概況を、國友文學士より報告し、更に二月十二日同所に理事會を開き、本部の擴張としては東京府下の工業者の會合に於て、福田理事長、本多監事、大塚理事等出席の上、本會の趣旨を說明して一般に贊同を求むる事、本會の擴張に伴ふ講師增加に關する協

議、及び本多講師より既に事業を開始したる地方支部の概況に就て報告する所ありたり。

又客臘創立されたる名古屋及神戸支部は、本年の二月上旬講師として本多日生猊下西下、左記日割にて講演を開始したり

三月二日午後名古屋常徳寺に於て、鈴木バイオリン職工全部の爲に、講題は大詔煥發に就て、聽衆千名

同三日、午前同市愛知時計會社職工全部の爲に、講題は社會改造に就て、聽衆千餘名

同日午後同市山岸製材職工の爲めに講題は大詔煥發に就て、聽衆三百、外に鮮人五十人

同四日午前同市豐田紡織會社職工の爲に、講題は日本の美風、聽衆千二百名

同七日午後、神戸市三菱造船所職工の爲に、講題は社會改造に就て、聽衆四千五百名

同日、同所に於て第二回講演、講題は大詔煥發に就て、聽衆五千五百名

同八日兵庫縣赤穗郡相生擂磨造船所職工の爲に、講題は眞正の幸福、聽衆五千人

同九日神戸市鈴木製鋼所社員及び職工組長の爲に、講題は思想問題に就て二時間に亙り講演、聽衆三百名、

尚名古屋支部は四月上旬國技館及縣會議事堂に於て創立大會を開催すること、及び既に有力なる大會社の殆んど全部、即ち二十餘社の參加を見たるも、更に大擴張の爲に市内外各方面に向つて創立者の名を以て入會勸誘狀を發送することを決議したり。

日蓮主義宣傳學生聯合會發會大講演會

都下各大學及專門學校に於ける日蓮主義鑽仰學生によりて結束せる日蓮主義宣傳學生聯合會は本多日生猊下指導の下に昨年末以來屢々各學校幹事の折衝を重ね周到なる準備をなし居たる處去る一月廿四日神田駿河臺なる明治大學記念講堂に於て盛大なる發會大會を擧行する事を得たり、當日は折からの雨天なるも意とせず定刻の開會時刻迄に聽衆は續々參會し來り各學校辯士の特辯及本多日生猊下の師子吼に依つて多大なる感動を與へられ近來稀なる盛會を呈せり。

尚當日は本多猊下が開會冒頭もなく來會せられて學生に氣勢を添へられしを始め陸軍少將小原正恒閣下慶應大學教授柴田一能先生、文學士國友日斌師等の臨席を忝うして、一段の光彩を放つ事を得たるは幸なりき

其の他陸軍大將、大迫尙道閣下、海軍中將石橋市閣下外多數名士の祝辭及各地よりの祝電數拾通に達したり、左に當日の次第を掲げむ

一開會之辭　帝國大學　郷　密一
一宣言朗讀　帝國大學　中野善敎
一改造は心よりこそ　明治大學　若林不比等
一日蓮とは如何なる人ぞ　帝國大學　金鳥英夫
一積極的宗教　東洋大學　古谷幹夫
一道義的統一　日蓮宗大學　伊丹靈瑞
一青年と日蓮主義　早稲田大學　小高良作
一眞我の開顯　第一高等學校　西山正文
一南無妙法蓮華經と日本國體　高等商業　菊田慶太郎
一子父の法を弘む世界の益あり　日本大學　三浦隨智
一慶讚之辭（田中智學先生代讀）　國柱會講師　高知尾誠吉先生
一來賓祝辭　陸軍少將　野澤仲吾閣下
　　陸軍少將　小原正恒閣下
　　慶應義塾教授　柴田一能先生
一祝辭祝電披露
一日蓮主義と實際問題　大僧正　本多日生猊下
一閉會之辭　明治大學　若林不比等
萬歲三唱（時に六時）

國柱會總裁田中先生は病中來會し得ず慶讚之辭を寄せて代讀せしめらる、次いで有志の茶話會を別室に開催す、國友日斌師本田仙太郎氏の激勵の辭ありて一同歡を盡して散會せるは八時なりき。

左に宣言書及び會則を掲ぐ

日蓮主義宣傳學生聯合會宣言書

私共は無暗に自己を主張して世を忘れ人を忘れ國を忘れて、一方にのみ走つた偏狹な主張を排斥します。私共は徒らに自己を否定して天國を夢み極樂を空想する敎に反對します私共は現在人々が踏みしめてゐる現實の世界そのものを淨化して、其内から尊い自己本然の姿を見出さなければならない。私共は一切の邪義に對しては敢然として正義の叫びを高唱し、その爲には命を惜んではならない。

かゝる敎こそ精神的にも肉體的にも救はれざる人の救はれる眞の敎であり、それが法華經の根本精神であり、此敎あればこそ日蓮聖人が血の滴る如き努力を以て體驗せられた一代六十年の迫害史に、無上の意義が含まれてをる事を思ふ時、私共はその敎を一宗一派の私すべくあまりに大きい事を知ります。またその敎は寺院の隅に押し込めて置くべく餘りに尊い事を感じます。

殊に今の世の思想問題も社會問題も、私共をして山中で思ひを靜め研學にのみ沒頭せしむべく餘りに急を告げてゐます。

私共が純信な學徒の心を以て對外的に宣傳運動を起すに至つたのはこれが爲であります。

會則

一、會名　本會は日蓮主義宣傳學生聯合會と稱す。

二、目的　本會の目的は各自修養の爲め、内敬虔なる態度を以て日蓮聖人の主義及び人格を讃仰し、外對世間的主義の宣傳を以て社會の改善人文の向上に資せんことを期す。

三、會員　本會は前條の主旨に贊同せる都下各大學各專門學校學生を以て會員とす。

四、事業　毎月一回以上主義宣傳の爲め公開講演會を開催することを原則とし其他臨機適當なる宣傳運動をなす。

五、幹事　本會の幹事は各學校二名を選出し校内と本會との聯絡を計り諸般の事務を掌理す。

六、事務所　本會の事務所は當分淺草清島町統一閣に置く。

以上

大正九年一月

日蓮主義宣傳學生聯合會第二回講演會

日蓮主義宣傳學生聯合會發會大會を擧行せる學生聯合會は去二月十五日第二回講演會を神田今川小路なる專修大學に於て開催せり當日は本年最大の降雪にて六花紛紛と降る中を熱烈なる求道者數百名參會せるは實に感謝に堪へざりき學義に明治大學に於て發會大會を擧行せる學生聯合會は去二月十五日第二回講演會を神田今川小路なる專修大學に於て開催せり當日は本年最大の降雪にて六花紛紛と降る中を熱烈なる求道者數百名參會せるは實に感謝に堪へざりき學生辯士始め却て意氣大いに昂り最後閉會に到る迄終始緊張せる氣分を以て終る事を得たり。

因に當日次第左の如し

一開會之辭　專修大學　近藤善光
一思想戰上に立ちて　東洋商業　邊見
一我が使命　日本大學　勝見賢榮
一日蓮は日本の柱なり　第一高等學校　古谷善次郎
一持妙法華問答鈔朗讀　早稲田大學　小高良作
一日蓮主義と現代　帝國大學　郷　密一
一先づ化他より進まん　明治大學　本橋利一
一日蓮主義信仰の出發點　高等商業　船口滿壽
一生きよ　東洋大學　富元會榮
一闇夜に滿月の出づるが如し　日蓮宗大學　池田正仁
一青年の主義は？　賢助員　妹尾義郎君
一平等と差別　陸軍少將　野澤悌吾閣下
一爾自らを救へ　文學士　加藤文雄先生
一閉會之辭　專修大學　近藤善光

時に六時。閉會後例に依つて茶話會を開く。出席者數十名に達し野澤閣下加藤先生を中心に熱烈なる會合なりき歡を盡して散會せるは八時

統一閣月報

▲定期日曜講演會

一月十八日。如說修行　長谷川義一。覺めたる生活　妹尾義郎。佛敎信仰の正統　本多日生。二十五日　得佛所護念　高木本順。信仰の改造　關田日城、佛敎信仰の正統　本多日生。

二月一日。報恩の生活　秋山乾英、土宇御書拜讀

妹尾義郎、日蓮主義五大綱要　荏川日堂。
八日、戰後國民の覺醒　大森林男、守護國家論　木村日保、本門の題目　井村日成。
▲二月十五日。釋尊御涅槃會の法要を營み併せて記念講演會を開く。釋尊の涅槃、木村義明、現代と安國論　森川日修、佛教信仰の正統本多日生。
▲統一團附屬講演會
毎日曜午前子供會　毎土曜日夜青年會日蓮主義研鑽會。一月十七日午後二時より地明婦人會、講師關田日城。二十日夜、向島川島松雄氏宅、開會の宣言　加藤重太郎、哲學より宗教へ　永瀬平一、日蓮主義綱要　村井日成　餘興講談　桃川蝶花
一月十一日　紀元節の佳節を以て日本橋區橋町二丁目織物問屋　中村治平　氏宅にて開講、日蓮主義と現代　妹尾義郎、日蓮主義の一青年店員高木敬夫氏の熱誠が產み出したる所なり多謝。十三日、木郷正道會に家人病氣にて休講。十五日日本橋　久保田氏宅、長谷川義一、關田日城。
○喜捨芳名
紫大幕　内海頴二氏
金五拾圓　無名氏
（經師三百遠忌の節）
金壹百圓　大原亮氏
（還暦の祝として）
金壹圓　青森　加藤芳太郎殿
金貳圓　無名氏
金拾圓　大阪　友廣善夫殿
金壹圓（子供會）塚木まづ殿
▲釋尊涅槃會喜捨芳名
金五圓　塚本丑太郎殿
金五拾錢　林部熊作殿
金三圓　吉田ふさ子殿
金五十錢　津川明信殿
金壹圓　松本源七殿
金壹圓　坂本泰造殿
金壹圓　瞻岡甲松殿
金壹圓　淺野良吉殿
金壹圓　水野三太殿
金五圓　猪俣金太郎殿
金壹圓　長谷川嘉造殿
金壹圓　中村光三郎殿
金壹圓　岡野八右衛門殿
金五十錢　西尾伊太郎殿
金壹圓也

第一布教團の設立

荏川師等の幹旋盡力により今回顯本法華宗第一布教團設置せられ、關東及東北地方に大活動を開始する由
規約左の如し
顯本法華宗第一布教團規約
第壹條　本團ハ立正安國ノ聖訓ヲ遵奉シ護法護國ノ信念ヲ涵養シ國民教化ノ實績ヲ擧クル爲メ日蓮主義ヲ言論ト文章ニ依テ宣傳ス
第二條　本團ニ顯本法華宗第一教區第十教區第十一教區ニ存在スル寺院住職及附員ヲ團員トシ同檀信徒ヲ賛助員トス
但シ日蓮主義ヲ信奉スル者ハ賛助員タル事ヲ得
第三條　本團ニ理事三名會計一名委員若干名ヲ置ク
第四條　本團ノ役員ハ團員ニ於テ選擧シ其ノ任期ハ滿三ケ年トス
第五條　理事ハ團務ヲ處理シ會計ハ出納ヲ司リ委員ハ擔當區域ヲ定メ團勢ノ擴張ニ努ム
第六條　本團ノ經費ハ團員ハ壹ケ年金五圓以下一圓以上ヲ負擔シ賛助員ハ壹ケ年金壹圓金五十錢金三十錢ノ三種トス
第七條　本團本部ヲ東京ニ置キ各地所在ノ同主義團體ト布教上氣脈ヲ通ジ宣傳ノ效果ヲ收ムベシ
第八條　本團ノ布教ハ東京ヲ除クノ外ハ各地年一回トシ文書傳道ハ年二回トス
但臨時必要ノ場合ニハ此ノ限リニアラズ
第九條　本團派遣ノ講師ノ旅費ノ手當ハ本部ヨリ支シ宿泊食料ハ司會者ノ負擔トス
第十條　派遣ノ講師ハ理事ニ於テ選定ス
第十一條　本團ハ時ニ講習會ヲ開催シ團員賛助員ノ修養ニ資スヘシ
第十二條　本團第一期ノ役員ハ發起人會ニ於テ選定ス
以上
大正九年一月　日

脚本　河邊の吹雪

野村香明子

第二場　丹波知見谷

舞臺面、正面に知見谷一帶の遠見。下手に雜木林。上手に堂葺きの古びたる家。條附座敷の一部。その出入口。家の後は街道の體。
登場人物。
常樂院日經。
市川左門。
同妻お蘭。
庄家の利兵衛。
幕吏三浦監物、
その他村人、
夕鐘の音遠く響き暮色漸く舞臺に迫つて、下手より利兵衛登場。
利　左門どの、左門どのはお家かな、
ト　内より妻お蘭出て來り
蘭　モア、どなたかと思へば利兵衛樣、さアちとお這入りなされませ。
利　いや、ちと急ぎの用があつて來たのぢやが左門どのはおいでなさるか、
蘭　生憎と只今村境まで行きましたが、急な御用とは何で御座りませう、
利　實は大事な事が出來てな、
蘭　ハテ、何事で御座りますやら、女の身で差出がましう御座りますが、譯を仰しやつて下さりませ、
利　但でもないが當家に滯在し居つて、念佛宗は地獄へ墮ると、途方もない事申し居るあの常樂院奴が、何時までも此の山に止まり居る事將軍家へ聞えたさうで、遂々召捕の衆がおいでなされた、そ
蘭　すれば京都から遙々と……
利　ト異樣の驚きに打たれる、
蘭　その中されるに、生じ庇護致したものは同
利　心と見做し、重い罪科にお問ひなされるとやら、すりやお前さん方夫婦も同心者とのお科あらう、何とあの坊主をば叩出して、災難惡除するがよいわ、俺や古い馴染甲斐に、こつそり注進にやつて來た、
蘭　ほんに御親切な事で御座りますし、したが何故にお召捕りなされます、常樂院樣はお德の高い御出家樣、ちとお上のなされ方腑に落ませぬ、
利　兎角云ふのは笑止の沙汰、彼奴は常に法華獨の成佛を說いて、西方極樂への往生を願ふ念佛宗をば、口汚く雜言し居つたが、ありや全く經文にない僞事申すと知れたので此の靈にして置けば末怖しいと、召捕の事に定つたさうな、
蘭　利兵衛樣、そりや眞實でござんすかへ、四年此の方何かとお世話をしましたなれど、
利　ついぞその樣な事は聞きませぬ。俺が嘘僞でも云ふと思はつしやるのか、
蘭　夫なら今に、左門どのゝお主も、危い目に遇ふだらう、やれ痴た女子ぢや、
利　夫ならどこ迄も眞實で御座りますな、
蘭　執拗そのやうには云はぬもの、何で俺が共方にいらぬ心配をさせやう、はやもうお主達の上が危いとてこのやうに云ひ居るのぢや、
利　有難う御座ります、若しも良人の上に、ひよんな事でも起るやうなら、如何に尊いお上人樣とて、早やこれ切りの御緣と度さなければなりませぬ、
蘭　さゝ、さうなうてはならぬ、左門どのとてまさかお咎め受けやうとは申されまい、題目唱へて世人を惑はす乞食坊主なぞ、とつとと追ひ拂ふて明日よりは、他力往生願ふやう、念佛申せと女房甲斐に、とくと忠言さつしやるが其方のつとめ、
利　ほんにやう仰しやつて下されます、どのやうに有難い御出家とて、大事な良人には代へられませぬ、今にも歸つて參りませう程

利　に、乾度御親切を傳えまする、
さうなれば利兵衛も力を添へて、又何とか
取做ても進ぜやう

蘭利　どうぞお賴み申まする、
こんな事にも成らうかと、此の村でも日經
に歸依せぬ者は俺ばかり、結構な念佛さえ
申して居れば、極樂往生出來やうものを、
痴者奴が題目なぞと、
いや、全く罰當りで、ハツ……
ト　小氣味よげに匆々下手へ入る

蘭　どうやら歸りも遲いやうな、もしや左門ど
の〻上に變つたことでもありはせぬか、京
の六條河原とやらでも、お弟子達五人が等
じような、お處刑にお遇ひなされたと聽く
ほどに、日經樣へ歸依深い良人のこと、どう
ぞ繫る災難が無ければよいに……

左　氣遣はしげの思入、上手より左門登場
ト　お蘭今歸つたぞ、はや上人のお歸りに間も
あるまいと、きつう急いで參つた、

蘭　おゝお歸りなされませ、

左　どうぢや、夕餉に參らすもの、お洗足の湯
の用意はよからうな、

蘭　左門どの、それ所では御座りませぬ、氣に
懸ることを聽きましたゆへ、恁うして主の
歸りを待つて居りました、

左　はて、何ぞ變つたことが上人の上にでも起
つたか、

蘭　聽けば都から捕手の衆が、お上人樣を召捕
らうと、遙々此の村へ參つたと申します、

左　して夫は何故ぢやな、

蘭　庄家の利兵衛樣が申されまするに、念佛宗
を雜言なさる日經樣の法門は、世の人を迷
はす僞り言、あまりの事に召捕つて死罪に
なさらう樣子にお話なされて御座ります、

左　扨て〳〵執拗な將軍家のなされ方法華經本
門の題目を弘通なさるに、何とて左樣の憎
しみをば、あの偉德の上人に持のであらう
と、お蘭、其方も妙宗に歸依した信者のこ
と、今聽く程のこと事實とならば、法華經
色讀の時漸く參つたと、我が身に替へて上
人の御無事を量らなければなるまいぞ、

蘭　一應尤な仰せと思ひまするが、夫では主
の身が立ちませぬ、此の上お庇ひ申した日
には左門どのも同罪と、恐ろしい事を聽い
て御座ります、何と日經樣との御緣もこれ
迄とどうぞ、お諦めなされて下さりませ、
何はともあれ主の上が大事で御座ります、

左　是はまた思ひ懸けぬことを聽く、身を捨て
て法華經に仕へよとは上人日頃の御教調、
夫にもかゝはらずあの利兵衛が戯言にたぶ
らかされて、其方の心は曇つたか、奴は無
間地獄に墮ちねばならぬ邪宗の者、そんな
輩の言葉にゆめ耳を貸しては相成らぬ、

蘭　お咎めなされて下さりますな、みんな主の
上を思へばこそ、決して妙法の信仰を忘れ
て申すのでは御座りませぬ、唯日經樣との
御緣をば、今日限りのことゝ諦めて下さり
ませ、

左　いゝや其の言葉を聽く事ならぬ、京の町に
も日宗六本山廿一箇寺と、寺の數は澤山あ
れど、まこと歸依して法華の妙味を知るに
は、なくてならぬ常樂院飾、若し御身に迫
る御災難あれば、此の身はつゆいとふ所で
ない……

蘭　夫ならば是程主の上を想ふて申しますに切
ない心の丈は察して下さりませぬか、

左　由ない風說に心を痛めるよりは、法華の切
力を願ふ心で眞實のお題目でも申すがよい
わ、

ト　云ひ捨てゝ內へ這入る、

蘭　はて、どうしたらよいであらう、あの樣に
お云ひなされては此上云ふも無駄なこと、
去りとて良人の上に萬一のことがあつては
ならず、日經樣とは此の世の御緣、二世を
誓つた夫婦の仲は……さ、こりやどうして
も私の一存で……

ト　思案の體よろしく鬱て內の樣子を氣遣ひ
ひ決心の思入にて下手へ急ぎ去る、上手
より日經樣登場、入口に立つて裾を
拂ひながら邊りを見廻し、

蘭　秋日和とは云ひながら、漫ろに肌寒い心地
が致すやうに成つて參つた、

ト　獨り言をする所へ椽の障子を明けて左
門現れ、

左　お歸りなされませ、只今御洗足を參らせま
す、

日　いや、その御心遣ひには及ばぬ、それへ愚
僧が來るであらう、
ト・入口へ近附かんとする所へ左門水を持
ち來る、日經樣に腰打かける、

左　最早や、八幡宮境內での御說法は濟みまし
て御座りますか、

日　先づお喜び下され、ことの外の參詣人にて
豫て發願致した一寺建立の儀も、日まだ淺
いにもかゝはらず、寄進下さる信者の淨財
夥しう、今に見事な堂宇を、此の知見谷
に建て申すまでに運んで御座る、

左　夫はまた何よりの事、然らば日頃の志願に
御座りますれば私共が此の住居を拂ひ、
此所に正法弘通の道場を、お開きなされて
下さりませ、

日　何かの事は配慮を待つて、早々此の山家一
圓の守護ともならう、圓浮提の諸佛を勸請
し參らせると、致さうでは御座らぬか、
今より更に末法の世ありと思へば、妙宗の
前途に大光明とも云ふべき紀念の一寺、
是非に開基を得たい物と存じまする、然し
又もや御邊には幕府の迫害むらがり懸つて
居りまする、

左　夫はまた珍らしいことを耳に致す、日經こ
の丹波の山奧に今尙生きてありと抑は何者
が吹聽いたしたので御座らう、して、此度
お念佛無間の法門ならぬとの宣旨かな、
何樣その儀にて、四ケ格言の法門僞りごと
と、流石は阿鼻大城へも墮つべき因緣もつ
た無道の衆、理不盡にもまだ一つ事を申し
居りまする、夫ばかりか、此度は死罪にも
致すまじい宗醜にて、早や此村まで召捕の
役人參つたと申すこと、如何御分別あらせ
ませう、

日　さほど日經の頭が欲しくば、見らるゝ、通
り耳鼻を削がれて、誠に穢汚しきものなれ
ど、開祖大士の昔を偲んで、勇ましく法華
經に奉ると致すであらう、

左　その御意中日頃教化に預る私に、會得致
されぬでは御座りませぬ、不肖左門も同心
ながら、此の際、一命を捨てらるゝ事たゞ
樣迹の者等が卑怯橫暴の心狀を充すに遇ま
す、妙宗衰退の意氣を發剌たらしむるには
昏ないこと、唯願はくは難を避けて、本化
妙法流布のため、何處へなりとも、落ちさ
せられん事をお願ひ申します、

日　經の如きをさはどに思し下さる芳志は忝
けなく、また惡魔に呪詛るゝ、風波もかば
かりはあらじと思ふ逆徒の迫害も、本門三
大祕法の妙趣を體得致す身の、齒牙にかく
べきにては御座らぬが、由來正法弘通には
二途あるもの、船の順風に帆を擧げたるが
やう一切衆生を敎化致すものと、折伏逆
化の敎軌に依らねばならぬを知つては、身
に、寸尺の權威もなき日經輩が、如何に宗
祖の本軌と定められし折伏を致すも、今は
唯時運に協はぬことゝ、たゞ潔よく命を拋
げて腰刺き同宗未練のともがらに、不惜身
命の本旨を示すも無駄ごとならず、必ずや
此後に續くべき天晴れの行者を見るであら
う、と一死報恩の衷情に御座るが、如何思
し下さるか、

左　お言葉返すは恐れながら、尊き御身を犧牲
に致されるは、何も此の期に及びませぬ、
日本國中何處の誰にか、本門妙宗の法雨を
俟てる幾多の衆生あるを思し召されて、左
門が强いてのお願ひ、お聞き分け下されま
せう、

日　切なる其の言葉は厚く祝着致す、板倉殿
の紹介にて、日經此の知見谷に迎ひ付いて
よりともかくも法門佛事に餘念なく仕へ申
したも、偏へに御身が並ならぬ庇護の賜物
なれど日本の國民たる愚僧が、幕府の掟に
隨はで一難迎へる毎に、意氣を高めて敎化
に勉めながら、今にして尙諸法者の信念を
飜し得ぬこと、諸佛の我等に時世を知見
せよとの諭旨のごと、思ひ做されて參つた
ゆへ、今かく申しはしたものゝ、思ひ返せ
ば勇猛精進に向ふ所、今日の反逆やがては
雨後に明月を見る悅びとなるで御座らう、
さらばで御座ります、再び妙法の華咲く時
の爲、枉げても左門の願ひをお聽き分け下

されませう、

ト　云ひ果てぬ時下手俄かに騒々しくなる

ヤ、騒々しいあの人の氣配……何はともあれ先づ内へ入らせられますやう、日經を内に入れ邊りを見廻して後内へ同じく入る、下手より利兵衛、三浦捕吏等登場、

利　これがその常樂院奴の假住居、ちと案内を乞ひませう、

捕　エ、案内なぞ呼ぶには及ばぬ、

同　如何さま其の通り、直ぐ踏み込んで然るべきで御座る、

ト　利兵衛を退けて入らんとす、内より左門立ち出で捕吏の前に立ちはだかり

三　何者なれば無斷でお這入り召される、某は市川左門、今は浪人致せど錆刀を腰には致し居らぬぞ、ちと禮儀を弁へられよ、

利　ハツ〳〵、醉興にこれへ出向いた者共ではござらぬ、苟にも德川幕府の上旨を享け、京都より遙々參つたる某は三浦監物、當家に滯在罷在る沙門常樂院日經こと、世を憚ちす權れなげに念佛宗を誹謗致せど、此度日宗六本山廿一ケ寺の貫主等一同連血して、常樂院の申す法門、經釋の中にはこれなく、祖師の所立に任せたる義と一札認め、彼と同心に非ざる旨を上申致せしにより、依猶に任せて人心を惑亂致す日經の罪科宥し難しとの事に、早々彼をば召捕り

利　に參つた、いざ尋常に引渡されよ、

左　門どの、ひよんな事にもならうかと、日頃からよい加減なことにさつしやれと申したに、ついぞ聽入れもなかつたので遂々こんな事になつたのじや、然しよい女房を持たれたお陰で、どうやらお主の上は無事に濟みさうな、

左　はて、耳寄りな事を聽く、女房とは何處の女子で御座る、

利　扨て〳〵感の惡い人ぢやな、其方の女房お關どのが、良人は常樂院と同心でない證據

三　早う彼をば召捕つたがよいと其方の口上を注進に參られたので、俺はお歴々を恁うして御案内に立つて來た、

左　一度ならず二度三度、宗義弘通の美名の許に世を騒がしたる常樂院、去ぬる六條河原の處刑の砌、已に死罪となるべきを特別の

三　はからひにて、一死を免れながら、將軍家の慈悲、憐愍を打ち忘れて、又もやかゝる山奥に足を止め、愚昧の男女をたぶらかして念佛の邪道を唱へるとは、臣家たる者の分を辨へぬ横暴の沙汰、宜しく召捕つて迷言の根を斷つべく死刑と罪科は定まり居る、只今の注進に相違なければ、疾く日經をこれへ引いだされよ、兎角手間どる時は御身も

利　強つての願ひもあつた所、利兵衛が口を添へて其方の身上はお許を願ふた、さあ早う日經坊を出したがよい、

ト　左門始終を聽きたる後思入よろしく、何かと御配慮千萬恭けなう御座る、去らば常樂院師をお召捕り下され、然し我が身の上にかほどの事あらうとは露知らず、先刻村境の八幡宮まで得意の法門說教のため出向いて御座る、某今より伴ひ歸るほどに我が家の裏に立ち越されて、暫しが程お待ち下され、

左　其の云分ちと腑に落ちぬ、左樣な口上にて

三　何にも某を欺くは見え透いた痴事夫より眞直ぐに否應の返事致したがよいぞ、

左　是は又慮外なこと、市川左門見る影もなき浪人暮しは致せども、まだ武士の魂までも捨ては致さぬ、命に懸けても誓言致す、

利　此の樣に申からは間違ひも御座りますまい逃げやうとて此の知見谷は一方口、どの道袋の鼠で御座ります、

三　然らば暫時……

左　あれなる竹藪の陰にお待ち願ひたう御座る

利　御案内致しませう、

ト　先に立ちて四人を案内し去る、左門後見送りて愁然とす、日經靜にいで

日　殊の外なる迷惑かけた、唯然るべく日經を捕手の衆へお渡し召されよ、

左　始終の樣子をお聞きあつては、今更らながら身の不肖を恥ぢまする、信心堅固の者と

妻を見棄り居りしは左門が一生の不覺、此の上は兎角申すも心せき、唯一途に此所を落ちさせられ度う存じます、南に見ゆるは京への街道、是非なく此の山を分け進ませられて人も逢はぬ三里の千坂峠を若洲小濱の町へと、お急ぎなされませう、

ト　云ひ終るや素早く決心の色にて腹を斬る、日經夫と見て驚き止めんと、

日　早まつた事を致されるには及ばぬ、

左　何卒抽者の心中御了察あつて、一刻も早くこゝをお立ち召されませう、左門が一期のお願ひで御座ります、

日　嘘？かほど此の身を思し下さるからは、更に生き長らへて妙經の爲、是迄にも勝る獅子吼の勢ひして、一佛乘の妙理を提げて必ずや、邪宗討伐の行脚を致すで御座らう靈山淨土へ在はさば、釋尊初め開祖聖人へ日經が身のほどしかとお傳へ下されよ、

左　日宗の妙脈はたゞ、經上人一臂の上にありと御辛苦のほど具さに言上致すで御座りませう、

日　オ、左門どの……

左　上人樣……

日　さらばで御座る……

ト　一歩踏み出して又も別れを惜しむ

左　とくわらせられませう……

ト　勵ます如く刄を引いて急所を突き撞と其所へ仆れながら

河邊の吹雪

報恩の歌

妹尾義郎

ト　少しも早くお急ぎ召されませう、

左　嘘！左門どの……

ト　思ひ切つて花道へとかゝりながら後見返して

南無妙法蓮華經〳〵

左　唱へつゝ幾度か後顧て花道へ這入る

ト　左門見えずなる迄後見送つて次第に氣の遠くなる思入　幕

(一)來れよ友よ打ち連れて　日蓮大士の御手取りて
唱へまつらんお題目　辭や佛の御前に
(二)大和島根に生ひ立ちて　光る行手や大君の
惠みは高し山よりも　捧げまつらんお題目
(三)朝な夕なのおきふしに　身にしみわたる乳根の
情は深し海よりも　かへしまつらんお題目
(四)文よむことを敎へまし　物かくわざを授けます
我師の君のめぐみにも　報いまつらんお題目
(四)米一粒も民の骨　朝一すぢも人の汗
忘れ果てめや人の恩　共に唱へんお題目
(六)妙の御法の風吹けば　聞えの雲も晴れぬべし
仰げや高きみ佛の　月に唱へんお題目
〳〵　ちれん だいしの みてとりて
1.1.1 3|2.1 2 3|　2.2 1 3|2 4 5 5|6 5 3 3|2 —0 1
ゆきかとと—もとちつて　2 2 1 3|2 4 5 5|6 6 3 6|5—0 1
3 4 5 5|2 3 2 1|6 6 5. 6|1—0 1　と—な〜 まつらん おだいも く
5.5 6 6|5 5 3 3|2 2 3 2|1—0‖
ゆ—みや ほとけの おんま〜に

日蓮主義

戰士の伴侶

一部金壹圓八拾錢

民心變動の兆頗る急を告げ日連主義の戰士に對し進軍を促すこと切なりこの要求に應じ戰士の伴侶として教義の秘奥を開示せるものは實に本書なり書中論明する所は、思想問題と日蓮主義、宗教信仰の要義、法華經の五大教義、本尊の要義と其歸結、信行の要義と其歸結、得益の要義と其歸結、佛教人身觀の概要佛教倫理觀の概要の八大編にして記述極めて懇切なり知法思國の戰士速に一本を軍營に備へて韜略を謬ることと莫れ。

本多日生師著書一覽

○法華經の心髓　壹圓參拾錢
○日蓮主義の運用　金壹圓八拾錢
○聖訓要義　卷一、二、三、四、五既刊、壹部金壹圓七拾錢
○開目鈔詳解　上卷一部　金貳圓
○聖　語　錄　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の初步　金七拾錢
○東洋文明の權威　金壹圓八拾錢
○日　蓮　主　義　金壹圓貳拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓貳拾錢
○日蓮聖人正傳　金壹圓八拾錢
○日蓮聖人の感激　金壹圓八拾錢
○日蓮主義の綱要　金壹圓八拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓貳拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
○國民教化　金壹圓八拾錢
○法　幢　金壹圓八十錢
○戰士の伴侶　金壹圓八拾錢、各送料八錢
○大藏經要義　一部金參圓貳拾錢十一卷迄既刊　送料一部十八錢半年前金不要

購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番